



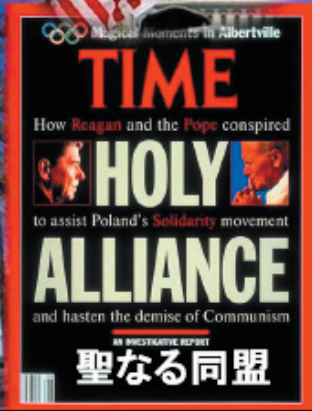
Sunrise Ministry

アンカー

Anchor



ワシントンD.C.



聖なる同盟



バチカン

荒らす憎むべきもの

“各時代の争闘” にあっぱれ!

オバマ大統領と法王ベネディクト16世の会見の意味

賢者への言葉 / 背教のオメガ

44号

2010年 1月

最終時代に与えられた特別なしるし

荒らす憎むべきもの



イエスは最終時代の民に「悟れ！」と言われた！

ギャリー・ギブス

アメijing・ファクツの記事は、ダニエル書12章の預言の未来適用について非常に重要であると思い載せることにした。

永遠の運命を決定する事件が切迫している！我々はただキリストの再臨を待ち望んでいるだけでは、栄光の王国を待ち望んで期待が外れ、失望した弟子たちのように、あるいは19世紀半ばの再臨信徒のように、大失望を経験するだけでなく、永遠の生命を失ってしまうことになる。

「またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる。その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」マラキ3:1-4。

「荒らす憎むべきものが立つ」ことと、「主(契約の使者)がたちまちその宮に来る」ことは同じ事件である。それは、非常に厳粛な時である。神の民にとって完全な清めの時であり、キリストの再臨に備えができる時である。

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものが、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。…その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである」(マタイ 24:15,16,21)。

この預言はいったい何の預言だろうか。今日、我々クリスチャンに重要な意味を持っているものであろうか？

聖書の預言の中で最も重要な興味深い預言の一つは、荒らす憎むべきものについての預言である。特に我々の好奇心をそそる預言である。なぜならこれは、我々の住んでいる世の終わりの特別なしるしとしてイエスが留意するように仰せになっているからである。

イエスの弟子たちが我々のために、最も重要な質問をしてくれた：

「どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」。

弟子たちは、ひそかにみもとにきて質問したが、今や我々は世の終わりの時代に住んでいるので、ひそかにではなく、大胆にはっきりと質問すべき問題ではないだろうか？ イエスが2000年前に預言された終末の前兆を我々は見せられてはいないだろうか？

イエスは答えて言われた：

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものが、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりな。畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ。その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである」(マタイ24:3, 15-21)。

多くのクリスチャンが、この聖句は、終わりの時に関する特別なはっきりとしたしるしであると理解している。しかし、この荒らす憎むべきものは、重要なしるしであることには同意するものの、一致し

た見解を持っていないのが現状である。何か将来に起こるしるしであるとは思ふものの、はっきりとしたことは言えないので混乱が見られる現状である。盲人が盲人を導くという譬の状態である。

もちろん、荒らす憎むべきものははっきりしていると確信を持っている人たちもいる。ある人たちは、これは、紀元前168年と165年の間にエルサレム神殿を汚した、アンティオカス・エピファネスによって成就したこと以外の何ものでもないと信じている。彼らは、この憎むべきものは、アンティオカスで、彼がエルサレム神殿に豚のいけにえを捧げることによって荒らされたと思っている。ある人たちは、無神論的反キリストがエルサレム神殿を破壊して、そこに王座を設けるものが荒らす憎むべきものであると言う。ある人たちは、ローマのティトゥス将軍によって、紀元70年にエルサレム神殿を滅ぼしたときに立てられたローマの軍旗だと信じる。

荒らす憎むべきものとは、「荒らすことをもたらす憎むべきもの」という意味である。つまり、荒廃をもたらす憎むべきものという意味である。それは何であろうか？この全部が正しい答えであろうか？そのうちの一つが正しい答えだろうか？あるいはどれも正しい答えではないのだろうか？これらの質問に答えることは非常に重要である。なぜなら、イエスは、これは我々の命にかかわる問題と言っておられるからである。

イエスは、この荒らす憎むべきものの研究について、ダニエル書に焦点を当てている(マタイ24:15)。ダニエル書を注意深く研究すると、荒らす憎むべきものは、三つの部分に分けることができる。それは、次のことである：

ダニエルの時代の荒らす憎むべきもの(第一のエルサレム神殿にかかわる)、イエスの時代の荒らす憎むべきもの(第二の神殿にかかわる)、そして終わりの時の荒らす憎むべきもの(全キリスト教会にかかわる)。ダニエル書に出てくる荒らす憎むべきものは、三つとも一貫した共通性を持っており、それぞれの型である。

第一の荒らす憎むべきもの

この預言的事件の奥義を解明する鍵は、ダニエル書1章の最初の2節に見出すことができる。

「ユダの王エホヤキムの治世の第三年にバビロンの王ネブカデネザルはエルサレムにきて、これを攻め囲んだ。主はユダの王エホヤキムと、神の宮の器具の一部とを、彼の手にもたされたので、彼

はこれをシナルの地の自分の神の宮に携えゆき、その器具を自分の神の蔵に納めた」(ダニエル1:1,2)。

この短い二つの文節に、ダニエルは、この書の歴史的背景を簡潔に述べている。続けて読むと、エルサレム崩壊と荒廃状態が彼の時代にあったことを知ることができる。エホヤキムの治世第三年に、エルサレムは崩壊し、荒廃状態になり、多くの者がバビロンの捕虜となる。そのことを歴代志下36章に見ることができる。「エホヤキムは王となった時二十五歳で、十一年の間エルサレムで世を治めた。彼はその神、主の前に悪を行った」(36:5)。

エホヤキムの悪い行いがユダの国民を捕囚に導き、エルサレムは荒廃したのである。

エホヤキムの悪い行いについて、次のように描写されている:「エホヤキムのその他の行為、その行った憎むべき事および彼がひそかに行った事などは、イスラエルとユダの列王の書にしるされている。その子エホヤキンが彼に代って王となった」(歴代志下36:8)。

残念なことに彼の息子エホヤキンは、父と同じように悪を行った。その結果、彼も捕虜となる。「エホヤキンは王となった時八歳で、エルサレムで三月と十日の間、世を治め、主の前に悪を行った。年が改まり春になって、ネブカデネザル王は人をつかわして、彼を主の宮の尊い器物と共にバビロンに連れて行かせ、その兄弟ゼデキヤをユダとエルサレムの王とした。ゼデキヤは王となった時二十一歳で、十一年の間エルサレムで世を治めた」(同9-11)。

聖書には、最後の王に任命されたゼデキヤ王は、先の二人の道から離れるどころか次のように記されている：

「彼はその神、主の前に悪を行い、主の言葉を伝える預言者エレミヤの前に、身をひくくしなかった。彼はまた、彼に神をさして誓わせたネブカデネザル王にもそむいた。彼は強情で、その心をかたくなにして、イスラエルの神、主に立ち返らなかった。祭司のかしらたちおよび民らもまた、すべて異邦人のもろもろの憎むべき行為にならって、はなはだしく罪を犯し、主がエルサレムに聖別しておかれた主の宮を汚した」(同12-14)。政治的宗教的指導者たちも、民も同じように、異邦人のもろもろの憎むべき行為を増し加えた。神の真理を捨てて、主の宮を汚すにいたったのである。新改訳には「そのうえ、祭司長全員と民も、異邦の民の、忌みきらうべきすべてのならわしをまねて、不信に不信を重ね、主がエルサレムで聖別された主の宮を汚した」とある(14節)。

これらの憎むべきこと、 あるいは忌みきらうべきことが聖所、 主の家を荒廃させるに至った。

当時の宗教指導者たちが意図的に異邦人の礼拝形式を、神の礼拝に取り入れるように指導した。神の戒めの代わりに人間の無意味な意見を取り入れることによって、指導者たちは、神の怒りを引き起こした。民は、神の悔い改めと改革への招きを拒み、その結果を刈り取るようになった。「そこで主はカルデヤびとの王を彼らに攻めこさせられたので、彼はその聖所の家でつぎをもって若者たちを殺し、若者をも、処女をも、老人をも、しらがの者をもあわれまなかった。主は彼らをことごとく彼の手に渡された」(同17)。

これは、流血にいたったばかりでなく、街と聖所の完全な崩壊をもたらすことになった(19節)。「これはエレミヤの口によって伝えられた主の言葉の成就するためであった。こうして国はついにその安息をうけた。すなわちこれはその荒れている間、安息して、ついに七十年が満ちた」(21節)。異邦人の宗教的な憎むべきことを行うことによって、彼らの国と街と聖所は荒廃する結果となった。

安息日を犯すことが荒廃をもたらした!

このような荒廃をもたらした憎むべきこととは、いったい何であったか? 「これはエレミヤの口によって伝えられた主の言葉の成就するためであった」なら、エレミヤに聞けばわかるはずである。エレミヤ17章に預言者は、すべての民に告げるように命じられる。もし安息日を聖別し守るなら、彼らの街は永遠に続き、周囲の国々を悔い改めさせる器となったはずである(エレミヤ17:19-26)。

しかし、安息日を守らなければ、聖なる神はこの街に荒廃をもたらすとされた。

「しかし、もしあなたがたがわたしに聞き従わないで、安息日を聖別して守ることをせず、安息日に荷をたずさえてエルサレムの門にはいるならば、わたしは火をその門の中に燃やして、エルサレムのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。その火は消えることがない」(同27節)。

悲しいかな、ユダヤ人は、神の安息日を破り続けて自らの破滅と捕囚を招いた。こうしてエレミヤの預言は成就するにいたった。「これはエレミヤの口によって伝えられた主の言葉の成就するためであった。こうして国はついにその安息をうけた。すなわちこれはその荒れている間、安息して、ついに七十

年が満ちた」(歴代志下36:21)。

同時代に生きていたエゼキエルも、聖所において神の民が憎むべきことを行っていたことを語っている。エゼキエル8章にそのことが記されている。「時に彼はわたしに言われた、『人の子よ、目をあげて北の方をのぞめ』。そこでわたしが目をあげて北の方をのぞむと、見よ、祭壇の門の北にあたって、その入口に、このねたみの偶像があった。

彼はまたわたしに言われた、『人の子よ、あなたは彼らのしていること、すなわちイスラエルの家がここでしている大いなる憎むべきことを見るか。これはわたしを聖所から遠ざけるものである。しかしあなたは、さらに大いなる憎むべきことを見るだろう』」(5,6節)。「憎むべき偶像」礼拝について、9-15に描写し、そして14節に「さらに大いなる憎むべきこと」が何であるかを説明している：

「そして彼はわたしを連れて主の家の北の門の入口に行った。見よ、そこに女たちがすわって、タンムズのために泣いていた。その時、彼はわたしに言われた『人の子よ、あなたはこれを見たか。これよりもさらに大いなる憎むべきことを見るだろう』。彼はまたわたしを連れて、主の家の内庭にはいった。見よ、主の宮の入口に、廊と祭壇との間に二十五人ばかりの人が、主の宮にその背中を向け、顔を東に向け、東に向かって太陽を拝んでいた。時に彼はわたしに言われた、『人の子よ、あなたはこれを見たか。ユダの家にとって、彼らがここでしているこれらの憎むべきわざは軽いことであるか。彼らはこの地を暴虐で満ちし、さらにわたしを怒らせる。見よ、彼らはその鼻に木の枝を置く。それゆえ、わたしも憤って事を行う。わたしの目は彼らを惜しみ見ず、またあわれまない。たとい彼らがわたしの耳に大声で呼ばわっても、わたしは彼らの言うことを聞かない」。

神にとって「さらに大いなる憎むべきこと」とは太陽礼拝である。

神は神殿建設にあたって、異邦人の習慣とは全く異なった礼拝形式を指示された。聖所は東を背にして作られた。礼拝の中心である契約の箱は、幕屋の西に置かれた。しかし、神の民に異教が入ってきて、指導者たちが神の教えに背いて太陽に向かって礼拝をするようになった。これは恐るべき背信であった。

エゼキエルもエレミヤも聖安息日を破る異教の習慣が、神の礼拝に持ち込まれたことを指摘している。それは、清くない獣、タンムズ、異教の神々の偶像礼拝や、太陽礼拝を持ち込んでくることによっ

て、神の憎しみを買ったのである。このような神の忌み嫌われる異教の習慣のゆえに、神は彼らが異教の国に滅ぼされ、荒廃することをお許しになったのである。

ダニエル自身、神の民の荒廃した状態をどのように懺悔しているだろうか？

「主よ、どうぞあなたが、これまで正しいみわざをなされたように、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる山から、あなたの怒りと憤りを取り去ってください。これはわれわれの罪と、われわれの先祖の不義のために、エルサレムと、あなたの民が、われわれの周囲の者の物笑いとなったからです。それゆえ、われわれの神よ、しもべの祈と願いを聞いてください。主よ、あなたご自身のために、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください」(ダニエル9:16-17)。

覚えていたいことは、 この神の憎まれることを行ったのは 神の民であるということである。

その結果、神の保護を失い、神の裁きを招き、荒廃するという懲らしめを受けたのである。このダニエルの時代の荒らす憎むべきものがユダヤの最初の神殿に起こったことは、そのあとに続く、二つの荒らす憎むべきものの型であった。

第二の荒らす憎むべきもの

エルサレム神殿の荒廃

70年のバビロン捕囚が終わり、ユダヤ人は神殿を再建した。指導者たちは、二度と罪を犯さず、異国に捕虜となることがないように、今度は多くの規則を作り上げた。特に第四条の安息日についてはうるさいほどの規則を作って、彼ら自身を他国の支配から守ろうとした。彼らは、安息日を犯したために、捕囚となったのだから、安息日を守るために事細かい規則を作った。

その結果、安息日を守る500以上の規則を作った。その中には、まったくバカらしいものがあった：たとえば、安息日には卵を太陽にあててはならない、なぜなら、安息日に料理することは第四条の違反となるからとか、安息日になってからランプに火をつけることは仕事をする事になるとか…。これらのことが律法主義に導いてしまった。ついに人々は、神に喜ばれるためには、指導者と伝統に従

うことだと思えるようになった。

またもや、彼らは不服従に導かれた。イエスは、ユダヤ人が信心深い様子をしてながら、実際は彼らの父祖たち、ダニエルの時代と同じように神の律法を破っていると言われた。「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』。あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」。

「あなたがたは、自分たちの言伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ。モーセは言ったではないか、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。それなのに、あなたがたは、もし人が父または母にむかって、あなたに差上げるはずのこのものはコルバン、すなわち、供え物ですと言えば、それでよいとして、その人は父母に対して、もう何もしないで済むのだと言っている。こうしてあなたがたは、自分たちが受けついだ言伝えによって、神の言を無にしている。また、このような事をしばしばおこなっている」(マルコ7:6-13)。

再び、彼らはむなしい、反逆的な礼拝に陥ってしまったのである。

ユダヤ人らは、厳格に律法を守っていると思ったが、自分たちの行いで自分を救うという異教の原則と全く同じ行いによる義に陥っていた。

「異教制度を通してサタンは長年の間人々を神から引き離してきた。だがサタンはイスラエルの信仰を堕落(腐敗、誤り)させることによって大勝利を勝ち取った。異教徒は自分たちが考え出したものに心をよせ、そしてこれを拝むことによって、神についての知識を失い、ますます堕落していった。

イスラエルもこれと同じであった。人は自らのわざによって自分自身を救うことができるという原則がすべての宗教の根底にあった」(希望上26)。

そのようなユダヤ人たちにイエスは言われた、「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとする人々たちである。しかし、神はあなたがたの心をご存じである。人々の間で尊ばれるものは、神のみまえでは忌みきらわれる[憎まれる]」と(ルカ16:15)。

イエスは、神の民の忌み嫌われることについて何回か言っておられる。最も顕著にあらわされたのが宮清めの時である。二回もあった。その時、彼はご自分の聖所が汚されているのを見て怒りを表され

た。イエスとユダヤ人との論争は激しくなった。宗教指導者らは、イエスがメシアのように見えないうし、イエスは彼らの伝統を尊敬しないし、彼らの決まりに従って安息日を守らなかったのを憎んだ。彼らは激怒してイエスを殺そうとはかる(ヨハネ5:10-16; マタイ12:1-4; マルコ3:1-6)。

宗教指導者らの抵抗にもかかわらず、イエスは幾たびも彼らに悔い改めと改革を求められた。しばしば、彼らの誤りをけん責し、神の前に尊い宗教の価値をお示しになった。しかし、彼らは心を益々かたくなにし、神の憐みの潮を打ち消した。

イエスが最後にエルサレムに入られた時、彼らの絶えまない反逆の結果がどうなるかを預言の目でご覧になった。悲しみに満ちて涙が頬を伝って流れ、この都の来るべき運命を預言なさった。「いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣いて言われた、『もしおまえも、この日に、平和をもたらず道を知ってさえいたら…しかし、それは今おまえの目に隠されている。いつかは、敵が周囲に壘を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである』(ルカ19:41-44)。

宮で数日教えられてから、イエスは宮の境内を最後に去る。またもや彼はご自分の民の背信のもたらす恐るべき結果を見て苦悶にうろたえる。「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」(ルカ19:41-44)。

二回の宮清めがなされ、神の憎まれることから離れるようにという招きに応じない結果、彼らの宮は荒らされるのであった。この預言は、ローマのティトゥス将軍がエルサレムを滅ぼした紀元70年に成就した。この第二の宮の荒廃は、第一の神殿の崩壊の写しのようなものである。両方とも背教した神の民の憎むべき事の結果、荒廃がもたらされたのであった。そして異教の軍隊によってさばきもたらされ、崩壊したのであった。

このエルサレムの荒廃は、ダニエルによって、ユダヤ人がメシアなる君を拒むことの結果として起こると預言された。

ダニエル9:25-27を注意深く研究するとその事実を知る。25節にイスラエルにメシアが来ることが預言された。エルサレムの街の回復も預言されている。しかし、また不吉な預言がなされる。26節にはメシアが自分の民によって殺され、再び聖所は荒廃することが預言される。

天使ガブリエルがダニエルにこの預言を伝えたとき、ダニエルは、自分の時代のことを思い出す。歴史は再び繰り返されることを預言は告げているが、全くその通りに起こった。紀元前586年と紀元後70年に、ネブカデネザルによって、そしてティトゥスによって聖所と街が荒廃状態に陥れたのは、神の民の憎むべき悪しき行いの結果であった。

イスラエルがメシアを拒んだ結果、神の民は神の不興を買ひ、土地を失った。イエスはそのことを預言して、「神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう」(マタイ21:43)と言われた。イスラエルは、彼らの強情な罪によって福音の特権を失ってしまった。

では、神の王国をどの国が受け継ぎ、その実を实らせるのであろうか?

聖書は、使徒ペテロの手紙ではっきり答えを与えている。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。

あなたがたは、以前は神の民でなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたことのない者であったが、いまは、あわれみを受けた者となっている」(1ペテロ2:9, 10)。

かつては異邦人であったが、今やキリスト・イエスにあって神の民、キリスト教に属する者となった。

新しい契約のもとに、キリスト教に改宗した者はみな、字義通りのアブラハムの子孫になされた約束にあずかる(ガラテヤ3:26-29)。

今や悔い改めた者は、だれでもイスラエルであり、神の聖所、宮と言われている。ローマ2:28, 29; エペソ2:11-13; 19-22; 1ペテロ2:5の聖句はその事実を明確に述べている。

第三の荒らす憎むべきもの

ダニエルが語っている新約時代の荒らす憎むべきものは、第三の、最後の時代のものである。これは、ダニエル8:13と11:31と12:11に見られる。預言的歴史を研究する者は、これらの聖句は、法王権の確立と権力を預言したものであることを知るであろう。法王権は、エルサレムが滅ぼされる原因となった異教主義の悪しき習慣、教えを取り入れて成り立っていくことは、歴史上の明白な事実である。暗黒時代にキリスト教会に様々な像、タンムズ礼拝、太陽礼拝が入ってきた。今日もこれらの憎むべきもの、すなわち、聖徒の像、キャンドル、ロザリオ、イースター礼拝、太陽礼拝、等々がカトリック教会に見られる。

法王教の背教は、部分的にプロテスタント諸教会にも引き継がれている。それらの悪しき憎むべき習慣が、古代イスラエルを荒廃させたが、ルーツは同じく異教にある。カトリックもプロテスタントも神の聖所、教会にこれらの憎むべきものを育てているのである。キリスト教会は字義通りの昔のイスラエルの鏡である。我々は、もし、バビロンの壁に書かれた警告のメッセージに留意して、バビロンから脱出しなければ、古代イスラエルと同じ罪を繰り返し、同じ荒廃の刑罰を受ける危険がある。

神の民が背教の結果刈り取る荒廃をもたらす憎むべきものについて、ダニエル書に3回出てくることは明白である。

しかし、我々の時代の最後の荒廃をもたらす…憎むべきものが近づいているしるしは何であろうか？

ルカ21:20でイエスは、エルサレムの差し迫った滅亡の最後のしるしは何であると言われただろうか？「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたときとりなさい」。この聖句は、軍隊が憎むべきものであるとは言わず、むしろ軍隊は、荒廃をもたらす器である。神は、ローマの軍隊によってイスラエルの憎むべきことに「報復」を執行するのであった。

ローマの軍隊がエルサレムを包囲したとき、エルサレムの指導者、住民は恵みの境を越え、その不義の杯を満たしたのである。エルサレムに住んでいたクリスチャンにとっては、これが、神の裁きが迫っているしるしとなるのであった。最初のこのしるしを与えられたときが「山に逃げる」(21節)チャンスであった。紀元66年、ローマの将軍、ケスチウスが

都を包囲したとき、クリスチャンたちは、これが約束されたしるしで、逃げる時が来たことと悟ったのであった。逃げる機会を逸しなかったために、紀元70年のエルサレム滅亡の時、クリスチャンは、一人も死ななかったと言われている。

神は、初代クリスチャンにエルサレム脱出のしるしを与えられたように、我々にもしるしを与えておいでになる。この世界の恩恵期間が終了する時が近づいていることを知ることができるようにするためである。

黙示録13章、14章に、終わりの時がどれほど近いかを知る前兆は何かを記している。米国が先の獣、ローマ法王教の像を形作るとき、すなわち、米国の原則を犯して政治と宗教が結合するとき、この国は不義の杯が満ちる。その時、異教の日をあがめる米国日曜休業令が発布される。それは、黙示録13:15-17の預言の成就であり、その事件は、世界の終わりが速やかに来ることのしるしである。

E. G. ホワイトは次のように言っている：

「プロテスタント主義が手を伸ばし、深淵の向こうにあるローマ教会の権力の手を取り、奈落の向こうにある心霊術と握手しようと手を伸ばす時、また、この三者の結合による勢力下に米国がプロテスタント共和国としての憲法の原則をことごとく放棄し、ローマ法王の偽りとあざむきの宣伝に道を備えるその時こそ、我々はサタンに驚くべき働きがやってきたこと、また、世の終わりの近いことを知るのである。

ローマ軍の接近が弟子たちにとってエルサレムの滅亡のしるしであったように、この背教は、神の忍耐が限界に達したこと、我々の国家の不法の升目が満ち、憐みのみ使いは、飛び立ち、二度と戻ってこない飛行につこうとしているしるしとなるのである」 (5 T451)。

諸教会が神の聖なる安息日と取り替えて異教の休みの日を宗教的な法令とするという憎むべきことをするとき、悩みの時が始まることを知って、都会を離れなければならない。

荒らす憎むべきもの(荒廃をもたらすところの憎むべきもの)は、この最後の時代において、重要な研究課題となる。

我々はこの預言を注意深く研究するとき、終わりの時に与えられるはつきりとしたしるし「荒らす憎むべきもの」は日曜休業令であることが分かる。

米国がこの法令を發布する時、米帝国の破滅が始まるしるしである。

「プロテスタント諸教会は、恐るべき迫害を耐えた彼らの先祖たちの信仰に対する偽りの宗教を維持するために、世俗の権力と一体となるであろう。合衆国が法令を強制し、教会制度を支持するために、その権力を用いるまさにその時、プロテスタントアメリカは、法王の像を作らるであろう。そして米国は国家的背教が起こり、ついに国家的破滅に至るであろう」(スタディバイブル新586、ST 1910. 3. 22)。

我々の目の前で、まさに今米国はその方向に動いていることが分かるのではなからうか？

イエスは言われた。「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)」(マタイ24:15)と。イエスは、エルサレムの滅亡のことを言われたが、しかし、もっと直接的には、我々の世代のことを預言されたのである。

ほんとうに神を愛するかは、神の律法を愛するかでテストされる。サタンは、神の権威を覆すために、神の律法を覆そうとした。神の律法を愛するかは安息日を楽しみ、遵守するかがテストとなる。最後の争闘は安息日に焦点が当てられる。安息日に神の権威が見られる。安息日は神との契約のしるしである。神の「憎むべきもの」が法王権の、サタンの権力のしるしである日曜礼拝、日曜休業令である

なら、その前に取り除かれるのは何か良いものである。神の権威のしるしであるに違いない。第一、第二の荒廃をもたらしたのは、安息日をないがしろにすることであるなら、最後に荒廃をもたらすのは、神の安息日を人間の法律をもって無効にすることではなからうか？

イエスはダニエル書を悟れと言われた。ダニエルは「荒らす憎むべきもの」が立つ前に「常供の燔祭が取り除かれる」と言っている。

法律をもって安息日が諸教会によって無視され、日曜休業令が立てられるとき、キリストとサタンの大争闘の「天下分け目の決戦」が戦われる。

その時こそ、「我々はサタンの驚くべき働きがやってきたこと、また世の終わりの近いことを知るのである」(2SM81)。その時こそ、「神も働かれる時である」(詩篇119:126)。

いったん、荒らす憎むべきもの(日曜休業令)が立つと、世の終わり=キリストの再臨はどれほど近いかが分かるであろう。

ダニエルは言った:「荒らす憎むべきものが立てられる時から、1290日が定められている。待っていて1335日に至る者はさいわいです」と。

イエスとダニエルが言った荒らす憎むべきものが、未来に大規模な事件として起こることが分かると、1290日、1335日、ひと時とふた時と半時は字義通りの計算をしなければならぬ。いったん、日曜休業令が立つと、神は後の雨/大いなる叫びによって、義をもって速やかにご自分の働きを、ご自分の方法で終えられるのである。

NEWS

ドイツで日曜休業令の動き

聖夜前の日曜開店は違憲、ドイツ/憲法裁判所、小売業規制で

西国新聞社 SHIKOKU NEWS 2009/12/01

【ベルリン共同】ドイツ連邦憲法裁判所は1日、ベルリン市が百貨店やスーパーなど小売店に日曜日の営業を認めた条例に関連し、クリスマス前の4回の日曜日営業については「憲法違反」とする判決を下した。ただ、今年は同期間の営業が許される。

ドイツ最高裁は日曜のショッピングに規制を決定。

教会の勝訴：アシスト・ニュースのウォルフガング・ポルトツァー記者によると、ドイツ最高裁は首都ベルリンでのアドベント・シーズン期間中(待降節クリスマス前の約4週間)の日曜日のショッピングを規制すると裁定した。

カールツルッヒの連邦憲法裁判所は、今日、「2006年にベルリン州法が許可していた、日曜日の営業(一年で最高10回迄で、そのうちクリスマスまでに至る待降節の全4回の日曜日の営業も含む)」が違憲となることを裁定した。

ドイツ連邦憲法は、日曜日を休息の日、また「霊的向上の日」として保護している。

今回の裁判所の決定は、他の州の条例にも影響を及ぼすと見られるが、2010年から実施される。ベルリンのプロテスタント教会やカソリック教会が首都の自由なショッピング条例に異議を申し立て、憲法裁判所に上訴した。

ベルリンのプロテスタントの司教マーカス・ドロージは、週毎の休息の日を「文化的、社会的な業績」(文化的にも社会的にも向上すると言いたいのであろう)と述べている。プロテスタント教会総会議長のカテリン・ゴーリン・エカルドもまた、裁判所の決定を歓迎している。同氏は、休息の日(日曜日)を「社会全体へのクリスチャンの贈り物」であると述べている。同氏は(グリーン・パーティ)緑の党のメンバーで、ドイツ連邦下院の副議長でもある。(長谷川英美姉 提供)



“Keep the Faith” ミニストリーのハル・マイヤー牧師のコメント

European Bishops Still Pressing for Sunday Rest • February 23, 2009

ヨーロッパの司教たちは、なおも日曜日の休みを押し進めている

— 2009年2月23日



ローマがリードするこれらの教会は、それを正当化するために宗教的な議論を避けようとしていることに気づいていただきたい。彼らは、社会の最も高い関心事は、健康、節制、バランス、家族の時間、貧困層と、とどまることを知らない消費だとして、日曜日の休養が必要だという本質的に良い議論として使う。

大争闘下349, 350には、社会改革と日曜遵守運動がこっそりとつながってくる戦略について書いてある：

「……最も目だった重要な道徳的改革の一つである禁酒禁煙運動（節制[原文]）が、しばしば日曜日遵守運動と結びつけられる。日曜日遵守運動の主張者たちは、自分たちは社会の最高の利益を促進するためにほねおっていると称し、彼らとの協力を拒む者は、禁酒禁煙運動と改革の敵であると非難される。しかし、誤謬を助長する運動が、それ自体は善である働きと結合しているからといって、その誤謬を支持してよいということにはならない。われわれは、健全な食物にまぜることによって毒を隠すことはできても、それが毒であることには変わりないのである。それどころか、毒と気づかれぬために、それだけいっそう危険なものとなる。虚偽を、それをもっともらしく見えるようにさせるに足るだけの真理と結合させることが、サタンの策略の一つである。日曜日遵守運動の指導者たちは、人々が必要としている改革を提唱し、聖書と調和している諸原則を提唱するかもしれない。しかし、その中に、神の律法に矛盾する要求が含まれているかぎり、主のしもべたちは彼らと手をつなぐことはできない。彼らが神の戒めを捨てて人間の戒めを置いたことは、どんな理由によっても正当化できないのである」

日曜日であろうと他の日であろうと、休むことは神の律法を犯すことにはならない。何が神の律法の違反となるかということ、日曜日を神聖な日とするか、あるいは日曜礼拝を要求する法律となるときである。しかし、日曜日を休息の日とする法律には宗教的な動機があるのである。それは、カトリックの司教たち、ドイツのプロテスタント、英国教会によって促進されている。今のところ、これらの諸教会は、日曜遵守、または、日曜礼拝をせきたててはいない。日曜休業の法律化は、後々彼らの目的とする日曜神聖化の基礎作りをしているのである。

指導者たちは、ローマが権力の回復をねらっていることに気が付いていないかもしれない。しかし、彼らの議案には、日曜日神聖化がもくろまれていたし、今後も変わらない。

レビューアンドヘラルド、1889年12月24日号に次のようなコメントがある：

「神の民に対する重大な意味のある計画がいろいろな宗派の牧師の間で陰險な方法で進められている。そしてこの秘密の策動の目的は、日曜日の神聖化を強化するために大衆の好感を得ることである。もし大衆の日曜休業令に対する好感を得るように導くことができるなら、聖職者たちは、宗教上の憲法改正を獲得するように一致した感化を及ぼすことを意図しているのであり、国家として日曜日を遵守するように強要するであろう」

この引用文は、合衆国憲法のこと、1880年代の日曜休業令の問題が起きた時のことを言っているが、それは現代、ヨーロッパの各地でも同じ運動がなされることを除外するものではない。現在すさまじい世俗化が進んでいるヨーロッパの教会の司祭、牧師たちは、日曜礼拝の適当な時が来るまで彼らの計画を隠遁しようと慎重を期しているのである。

※ アメリカも州単位では、日曜休業令ができていところもある。しかし、国家として先に日曜休業令が發布され、そして世界中に強要される。もちろん、ヨーロッパでもその運動は並行して続けられると預言者は言っている。アメリカにおける国家的日曜休業令、そして世界的日曜休業令が非常に接近していることは確実である。これらのしるしはSDAにとって警告となるはずである。

”各時代の 大争闘” “にあっ ぱれ！”

終末事件のシナリオが、
1800年代にかくも正確に
預言されていた！



- ある重要な会議でA氏が、「カトリック教会は変わったんです」と言ったら、B氏は、「『各時代の争闘』によると『ローマは決して変わらない』と書いていますよ」と言った。すかさずA氏、「大争闘が書かれた19世紀の半ばのカトリックは変わっていなかったが、今は変わっているんです」。会議が終わって何人かの人に「先のA氏の発言をどう思いますか」「私も変だと思っていますよ」との返事。しかし、あのような場では思っていることを言えない雰囲気であったと言う。
- ある牧師が信者を訪問。「大争闘」の本がテーブルにおかれているのを見て、「こんな古い本を今頃読んでいるのですか？あなたの頭も古くなりますよ」と皮肉たっぷりの言い方をした。この信者は、「では、聖書は最も古い本ですけど、私の頭はどうなるのでしょうか」と言いたかったと後でもらした。
- 牧師会でのディスカッションのテープを聞いて、ある牧師の発言が気になった。「『大争闘』の本など書かれなければ良かったのだ」と。
- 1919年聖書会議から、証の書の靈感に対する疑いが生じた。1975年12月に世界総会本部で、紙に包まれた二つの小包が発見された。その小包には、聖書会議の速記ノートタイプライターで打ち直した2400頁に及ぶ資料が入っていた。この発見は、新神学提唱者には勝利と思わせるものであった。預言の霊は、歴史的な正確さばかりでなく、神学においても信憑性に欠けているものとされるようになった。時の総理は、A.G.ダニエルズであった(彼は25年間、最も長く世界総会総理を務めた)。

韓国において、ホーワード・リー先生がA. G. ダニエルズ総理を家庭に接待していた時のこと。女中にチキンを買ってくるように頼んで驚かせたそう。彼は、以前、E. G. ホワイトから真っ先に肉食を廃する誓約に署名するように言われて、拒否したことがあった。1922年の世界総会でA. G. ダニエルズ総理の終身在職権は終わり、W. A. スパイサーが総理として選ばれることになった。



A. G. ダニエルズ長老が癌で危篤になったとき、油注ぎの祈りを拒んだと言う。彼は、肉食に耽溺していたので、ある若い働き人が祈っていますと言ったら、「私の回復のために祈らないでくれ、自分自身で蒔いた種だから。私の救いのために祈ってくれ」と言われたそう。"The Greatest of all the Prophets" p169より。

カトリックは決して変わらない

バチカン第二公会議以来、ローマはすっかり変わったとプロテスタント諸教会は見るようになった。

ローマは変わったと明言したのは、トランスヨーロッパ支部の総務、Dr. レインダー・ブルーズマである。彼は2004年の7月～9月の安息日学校の教課の著者であった。その頃オランダユニオン・カンファランスの総理もしていた。

「ローマ・カトリック教会は、ほとんど世界において積極的に変わってきた。今や、カトリック教会は、聖書を読むのを許すだけでなく、薦めている。プロテスタントがうらやむほどの霊性がカトリック教会にはある。さらに、公式に宗教自由の原則を受け入れた」(Spectrum, Vol.27, Issue3, Summer 1999)。彼の考えは、広く世界のSDAに影響を及ぼした。

ヨハネ・パウロ2世、ベネディクト16世の教皇勅書には、カトリック教会だけがキリスト教であること、その教えに反する者は異端として罰せられるべきであることが明言されている。元アンドリュース大学教授、サムエル・バキオキは、「『ローマは決して変わらない』『(no salus extra ecclesia)ローマ・カトリック教会の外に救いはない』という真理の生きた、説得的な実例である」と述べた。ENDTIME ISSUES NEWSLETTER No. 132。

「ローマ教会は決して変わらないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない」大争闘下340。

「自分の目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかしカメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はへびのような不変の毒を隠している。...

カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たっていないという主張が、プロテスタントの諸国において唱えられてきたことには、理由がないではない。そこには変化があったのである。しかしその変化は、法王制の中にあったのではない」大争闘下328。

信教の自由を認めているだろうか

「オコンナー司教は、『カトリックの世界に危険を及ぼすことなく反対政策を実施できるようになるまで、信教の自由をがまんしているにすぎない』

と言っている。セントルイスの大司教は、かつて次のように語った。『異端や不信仰は犯罪である。だから、たとえばイタリアやスペインのように、すべての人がカトリック教徒であって、カトリック教がその国の法律の不可欠な一部となっているキリスト教国においては、こうしたことは他の犯罪と同様に処罰される』。...

プロテスタント教会は大いなる暗黒の中にある。そうでなければ、彼らは時のしるしを見分けるはずである。ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行なったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている」大争闘下320-323。

彼らは「時機をまっている」同339。

最終時代のスーパーパワーについて

1941年12月7日は、アメリカにとって転換の時となった。日本軍に真珠湾攻撃をされ、それ以来アメリカは世界に目を向け、世界の警備員(保安官)になったと言われている。

それから半世紀過ぎて、1989年12月にアメリカかソ連かという二極体制に終止符が打たれた。ある人はその当時のことを「コミュニズム(共産主義)が世界を支配するか、それともカトリシズム(バチカン)がそれを防止するか」という見方をしていた。ライフ誌も文芸春秋も結局は、ヨハネ・パウロ2世の勝利と称えた。実はバチカンは、西側のアメリカを利用していたのである。1991年から父ジョージ・ブッシュは、アメリカこそ、世界唯一の覇権国と思わせたが、それは間違っていた。

黙示録13章によると「海から上ってくる獣」(13:1)と「地から上ってくる獣」が仲良く世界支配のため活動する。「海から上ってくる獣」は、ダニエル7章にリンクさせると、明らかにローマ法王



教であることが分かる。「地から上ってくる獣」は、アメリカ合衆国を表す(大争闘下158-160)。ローマ法王教は全世界を支配するのであるが(3節,7節)、それを実現するのはアメリカの力を借りてやるのである。「地と地に住む人々に…先の獣を拝ませる」(12節)、「地に住む人々を惑わし、…先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた」(14節)。



ローマ・カトリック
海獣



プロテスタントアメリカ
地獣

現在、膨大な財政赤字と貿易赤字、それにドルの下落によって、世界の覇権は他に移るのではないかと危惧する評論家たちがいるが、聖書によるとそうではない。世界第一帝国と言われていたアメリカが、世界最小の国バチカンと組んでスーパーパワーとなるのである。世界終末のスーパーパワーは、一国でなく、二国である。「アメリカかソ連(共産主義か)」から「アメリカとバチカン(カトリック)」に変わったのだ。

中世時代にヨーロッパの政治、経済、宗教を1260年間にわたって支配したローマ(カトリック教会)は、預言の通りに一時致命的な傷を受けるが、それも癒されて世界のスーパーパワーとなることになっている。アメリカは、これほどまで発展させた自国の憲法さえ変えるのである。

大争闘下 161

「共和主義とプロテスタント主義が、国家の根本原則となった。これらの原則が、その権力と繁栄の秘けつである。全キリスト教国の、圧迫され踏みにじられた人々が、関心と希望を抱いてこの国に目を向けた。幾百万という人々がその岸辺にやって来て、米国は、世界で最も強い国の一つに数えられるまでになった。」

しかし、

「米国は、そのような行為によって、国家の方針の基礎として宣言した自由と平和の原則を裏切るのである。」

何のために国家の原則＝憲法を改正するのだろうか？

「憲法を改正して、日曜日遵守を強制する法律を確保しようと努力している人々は、それがどのような結果になるのかにほとんど気が付いていない。危機はまさに我々に臨もうとしている」5T 711。

「サタンの政策を議決する時、国の統治者たちは、彼ら自身を罪の人の側に置くであろう。それは国家的背教の時である。…それから罪の升目が満たされるのである。国家的背教は国家的破滅の兆候である」GCB 1891,259。

アメリカの宗教はプロテスタンティズムである。バチカンの宗教はカトリシズムである。宗教同士が手をつないで、ついにはバチカンの思惑通りにアメリカが政治、経済、宗教を支配し、それを全世界に強いるというのである。

1990年に元イエズス会士であり、バチカンのグレゴリアン大学院の教授、マラカイ・マーチンは、歴史家であり、バチカンのインサイダー(内部の情報に通じている人)でもあった。その著書「血の鍵」にローマの世界戦略が如実に描かれている。ソ連がどのように解体されるかに触れ、それは、ヨハネ・パウロ2世の戦略であったことが述べられている。その時、現れたのがソ連の書記長、ミカイル・ゴルバチョフであった。マラカイ・マーチンは、世界の覇権は三つの権力のもとに争われると言っていたが、結局は、バチカンと米国の二つに収まった。

その当時、ソ連邦は膨大な領域を有していた覇権を争う勢力であったが、1884年にE. G. ホワイト(終末時代の預言者)は、終末時代のプレーヤーとしてソ連をシナリオには入れていなかった。彼女はマーチン博士のような聖職者ではなかったが、神から直接の啓示を受けていたという点で、100年後のマラカイ・マーチンより有利な立場に立っていた。聖書では、三つのスーパーパワーではなく、ただ、二つのスーパーパワーを見ていた。興味深いことに、世界最大の国、アメリカと世界最小の国バチカンが同盟国になるというのである。マーチン博士が「血の鍵」を著した時には、共産主義ソ連は解体しつつあったのである。この米-バチカン両国間の関係はすでに成立しつつあった。1980年代の米ソ二極制の時にすでにバチカンの出現を見ていたのである。マーチン博士は、次のように言っていた：

「法王ヨハネ・パウロ2世は、使徒ペテロ継承264代目で…三つの世界的権力の最も広大にして深く経験を有する頭である」p 17。

マーチン博士が「広大な」と表現したのは、ローマ教会の聖職者、信者からなっている宗教的な影響

力を言っている。軍隊や武器は持たないが、NATOという同盟をバックに持っている。不思議なことになりざとなれば、この世的な権力を上手に使う世界的知的戦力、情報戦力を持っている。

E. G. ホワイトは、黙示録を書いた1800年前の使徒ヨハネと同じように、今から165年前に、幻のうちに将来を見ていたのである。

法王の権威は昔のように、今、また甦りつつある。かつてドイツの皇帝、ヘンリー4世が法王の権威をあえて無視したために、破門と廃位の宣告を受けた。法王の命令に力を得て彼に反逆した諸侯たちの、離反と威嚇に驚いたヘンリーは、法王と和解する必要を感じた。彼は王妃と忠実な従者とを伴って、法王の前に身を低めるため、真冬のアルプスを越えた。グレゴリーが留まっていた城に到着すると、王は護衛もなく外庭に案内され、その厳しい冬の寒さの中で、みすぼらしい衣を着、頭には何もかぶらず、はだしのまま、法王の前に出る許可を待った。彼が三日間断食とざんげを続けた後、ようやく法王は彼に赦免を与えた。



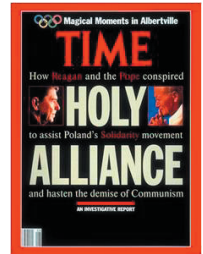
クリントン元大統領が不品行のために法王から厳しいお叱りを受けたことがあった。彼は、ヘンリー4世のような仕打ちは受けなかったが、詫びて世界的な秩序の中で上下の教訓を学んだようである。

アメリカとバチカンの癒着について

カリフォルニアのベーカーフィールドの新聞に右のような漫画で編集長は、この絵の象徴するようにアンクルサム(アメリカ)とバチカンの癒着の記事を載せた(Bakerfield Newspaper, California, Editorial)。SDAの牧師がこの編集長に「各時代の大争闘」を差し上げたそう。



命をかけて新大陸アメリカに逃げてきたプロテスタント(新教徒たち)なのに、そのアメリカとバチカン(ローマ・カトリック)との関係がこれほど親密になるとは誰が想像し得たであろうか。



大争闘下 350

プロテスタントと心霊術とローマとの三重の結合について

「合衆国の新教徒は、率先して、心霊術と手を結ぶために淵を越えて手を差しのべる。彼らはまた、ローマの権力と握手するために深淵を越えて手を差し出す。この三重の結合による勢力下、アメリカはローマの例にならって良心の権利をふみにじるのである。

- 米下院は、国連で416対1でバチカン(宗教巨大組織)に発言権を与えることが可決された。(ワシントンタイムズ誌2000、6月12日) 下院には3人のSDA議員がいたが、反対したのはSDAではなかったそう。

「宗教的法令に譲歩するどんな運動も、良心の自由に対して長年徐々に戦い続けてきた法王教への譲歩の行為である」マラナタ131。

米国の大統領はじめ、要員たちが共和党、民主党を問わず、どれほどひんぱんに法王と謁見しているかを見よ。ブッシュもオバマも法王の教えと計画をこの国で「実行する」と言い切ったのである。

大争闘下 321-322

「しかし一つの制度としてのローマ・カトリックは、この教会の歴史上のどの時代においてもそうであったように、今日でもキリストの福音と調和するものではない。プロテスタント教会は大いなる暗黒の中にある。そうでなければ、彼らは時のしるしを見分けるはずである。ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、①再び世界を支配するために、②また迫害を復活させるために、③またプロテスタントが行なったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。カトリック教は至るところに地歩を占めつつ

ある。プロテスタント諸国において、カトリックの教会や礼拝堂が数をましているのを見られよ。米国において、カトリック教の大学や神学校が人気を集め、プロテスタントに広く後援されているのを見られよ。」

※日本においてさえもそうである。(短期大学、専攻科20、高等学校専攻科114、中等学校、98、小学校54、幼稚園548)

「**最も危険な敵**」(大争闘下322)であるとの認識はプロテスタント諸教会のどこに見られるだろうか？

大争闘下 164 教会合同運動—エキュメニカル について

「プロテスタント教会内の大きな信仰の差異は、どんなに努力しても一致を図ることはできないということの決定的証拠であると考えられる人が多い。しかし、ここ数年にわたって、プロテスタントの諸教会内において共通の教義を土台として合同しようとする気運が強く動き出している。このような合同を達成するためには、たとい聖書の見地からどんなに重要なものであっても、すべての者が一致しない問題は、必然的に放棄されねばならなくなる。」



ルーテル教会とカトリックは信仰による義認の教理で一致？

これが書かれたのは1800年代であった!!

共通の教義とは日曜神聖と霊魂不滅の事である。

アメリカではかつて見られなかったことが起こりつつある!

教会を問わずみんなで「われらはみな一つ」と叫ぼう。ワシントンD.C.に集まった大群衆!



大争闘下 189-190

偽リバイバルについて

「一般のリバイバルは、ともすれば、想像に訴え、感情を刺激し、新奇なことに対する愛好心を満足させるようなやりかたで行なわれている。こうして得た改心者は、聖書の真理を聞くことを望まず、預言者や使徒たちのあかしに興味を示さない。集會も何か感情をそそるようなものが無いかぎり、彼らをひきつけることができない。冷静な理性に訴えるメッセージは、なんの反応も起こさない。彼らの永遠の幸福に直接関係のある、神の言葉の明白な警告も、注意を払われないのである。」



ベニー・ヒンの集會に行った米国西部のわが教会の牧師は、癒しを求めて孫を連れて行った。そしてSDA教会から去ってベニー・ヒンの支持者になったという。

大争闘下 190-191

「彼は、自分の欺瞞の力のもとに置くことのできる諸教会において、神の特別な祝福が注がれているかのように見せかける。大いなる宗教的関心と思われるものが現われる。多くの人々は、神が彼らのために驚くべきことをしておられると喜ぶが、それは、別の霊の働きなのである。宗教的装いのもとに、サタンは、キリスト教世界に自分の勢力を広げようとする。」

※ 今はコンピュータであらゆる種類の偽リバイバルが見られる。DVDも出ている。恐るべき心靈現象である。

大争闘と同じ著者がこう警告している。

「あなたが描写してくれた、インディアナで起こっているようなことが、恩恵期間終了直前に起こることを私は私に示された。あらゆる異様なことが実演されるであろう。ドラム、ダンス音楽と共に、叫び声があるだろう。理性の持ち主の感覚が混乱するために、正しい決断をあてにできなくなる。そして、これが聖霊の働きであると呼ばれるであろう。聖霊は、決してこのような方法、騒々しさではご自身を現されない。これは純潔で、真実で、人を高め、清める現代の真理を効果のないものにするため、自らの巧妙な方法を隠すためにサタンが考案したものである」2SM36。

同じ著者の「大争闘」の先駆になった初代文集425-429を読んでいただきたい。

「わたしは、この欺瞞が、急速に広がるのを見た。電光のような速度で走る列車が、わたしに示された」。

彼女は、全世界を欺瞞に陥れる心霊術の列車を見せられた。車掌はサタンである。



大争闘下 313

キリスト教の 装いをしてきた 心霊術について



「愛は神の第一のご性質としてくり返し説明されてはいるが、善と悪をほとんど区別しない弱々しい感傷主義に墮している。神の正義、罪に対する神の非難、神の聖なる律法の諸要求は、すべて無視されている。人々は十誡は死文であると考えるように教えられる。」

セレブレーションは、バチカン第二公会議から発信されたものである。メガチャーチの現象はキリスト教化した現代心霊術である（くわしくはアンカー41号を参照）。



大争闘下 352-353

気候変動について

「海や陸における事故や災害、大火災、激しい突風、すさまじい降雹、あらし、洪水、たつまき、津波、地震など、あらゆる場所に幾多の形でサタンは力をふるっている。彼は取り入れまぎわの収穫を全滅させ、ききんと困窮を引き起こす。彼は空気を恐るべきウイルスで汚染させ、幾千人もの人が悪疫で死ぬ。これらのできごとはますますひんぱんになり、悲惨なものになる。破滅は人間にも、動物にもおよび。『地は悲しみ、衰え、……天も地と共にしおれはてる。地はその住む民の下に汚された。これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ』(イザヤ書24:4,5)。

日曜安息日を犯すことは神を怒らせることであり、この罪が災害をもたらすのであって、それは日曜日遵守がきびしく実施されねばやまない、と宣言される。」

大争闘下 353

経済危機と日曜休業令について

「また、第四条の要求を主張して日曜日尊重を傷つける者は民を悩ます者であって、神の恩寵とこの世における繁栄の回復とを妨げていると宣言される [原文]」

※ アメリカで繁栄を回復しようとの運動が起こるが、経済危機に直面するからである。他にもE.G.ホワイトはそのことについて言及している(アンカー43号を参照)。

2004年にアメリカは「愛国法」なるものを制定した。大統領は、国のいかなる緊急事態にも、議会を通さなくても道徳的法令を発布することができるというものである。それは、何を意味するだろうか？日曜休業令が必要とあらば、突然発布される時が近づいていると言えるのではないだろうか？

大争闘上 64-66

ワルデンセス(ワルド派)について

ワルデンセスについてはキリスト教界でさえ、欺瞞に陥っている。彼らこそ「混ぜ物のない真理を持って」いた者たちで、「真理の保管者であった」。「彼らは、自国語で書かれた聖書の写本を持っていた」のである。B. G. ウィルキンソンによると、紀元120年に聖書写本はつくられていた。

しかし、一般の辞書、いや聖書辞典でさえも、「ワルド派」はA. D. 12世紀にフランス共和国のピーターワルドによって創始されたキリスト教の一派とされている。今では、聖書を保存していたのはカトリック教会であると言い、今日の、エキュメニカル聖書(新共同訳)は、最も古い、信頼に値する写本から翻訳されたものであるという欺瞞が横行しているのである。

大争闘下 27章

リバイバルと清め、悔い改めと聖化 クリスチャン経験について

現代の神学的、教理的な誤りから免れたいと望むなら、大争闘を読むことによって見破ることができるであろう。

なぜ、「各時代の争闘」は 書かれたのであろうか？

大争闘上「序論」(9)

悪魔の策略を見破り、危険をも見分けられるために：

「われわれは悪魔の策略を見破ることができ、そして、再臨の時に主の前に『傷なき者として』立つ者が避けなければならない危険をも、見分けることができるのである。」

「本書の目的は、過去の争闘に関する新しい事実を提示することよりも、むしろ未来の諸事件に関する事実と原則とを明らかにすることにある。しかし、こうした過去のすべての記録を、光と暗黒

との間の争闘の一部分として見るとき、そこには新しい意義が認められるのである。そして、これらの諸事件は、未来に光を投げ、過去の改革者たちのように、神の召しを受けて、この世のすべての幸福を犠牲にしても『神の言葉とイエス・キリストの証のために』立つ人々の道を、照らすのである。真理と誤謬との間の争闘の様相を解明すること、サタンの策略を明らかにし、これに抵抗して勝利する方法を示すこと、神は正義と慈愛をもって被造物を取り扱われるということが明らかになるよう、罪の起源とその最終的処置に関して光を投げかけつつ、悪という大問題に満足のゆく解決を与えること、そして神の律法が聖であって不変のものであることを明示すること—これらが本書の目的である。」

「…牧師たちや博士たちが新しい教理を取り入れ、誤りが一つまた一つと我々に押しつけられた。我々が多くの祈りをもって聖書を調べると、聖霊は我々の心に真理をもたらずのであった。…神の力が私に臨み、私は何が真理か何が誤りかを明らかにすることができるようにされるのであった。…私は幻を見せられ、説明が与えられるのであった。…

これらの真理はみな、私の書きものの中で不滅のものとなった。人間は次々と陰謀を企て、敵は魂に真理を捨てさせようと努める。しかし、主がホワイト姉妹を通して語り、彼女にメッセージを与えてくださったということを信じる者はみな、終りの時代に来る多くの惑わしから無事でいられるであろう」—8MR, pp. 319-320 (Letter 50, 1906年1月30日)。

1800年代に書かれたことがこれほど如実に、今まさに成就していることを見るとき、我々はイエスの証、すなわち預言の霊に全く信頼していいのではないだろうか。

私はこの「各時代の争闘」にあっばれ！と叫びたい！！

だから、「各時代の争闘」の著者、E. G. ホワイトは次のように言っているのである：

「わたしは、わたしが書いた他のどの本よりも、この本が配布されるのを切望する。なぜなら、争闘の中には、他のどの本よりも、世界に対する最後のメッセージがより明瞭に書かれているからである」手紙281、1905年。

オバマ大統領と 法王ベネディクト16世の 会見の意味

オーストラリア版「アンカー」2009年
10-12月号より



オバマは大統領に就任して6ヵ月経って、ベネディクト16世と初めての謁見をすることになった。2009年7月にもたれたG8経済サミットの二日後、7月10日にガーナに旅行する前にローマに立ち寄った。

この二人は30分間の密談の時を持った。中絶、クローニング（複製生物）、幹細胞研究などの問題においては意見の相違があったにもかかわらず、オバマとベネディクトは社会的正義と経済改革という世界的な幻においては意見を共有した。

法王は世界的貧困にG8が応答したという報告を聞いていた。そして法王は「3日間開かれたサミットにおいて、アメリカが発展途上国に200億ドルの援助をするということに8カ国が同意した (USA TODAY)」ことに対して喜びの意を表した。

バチカンとアメリカの筋によると、この二人の指導者は移民、中東和平、中絶問題について話し合ったと報告している。法王はオバマに、聖ペテロ広場とバチカン宮殿を描いたモザイク、それに世界規模の経済危機について最新の法王の勅書「真理の愛徳 (Caritas in Veritate)」の写しを手渡した。また、非公式に法王は2008年の「生命の尊厳 (Dignitas Personae)」という勅書を贈呈した。それを受け取るとオバマは、「飛行機の中で読める物ができました」と冗談ながら言った。

オバマは立ち去る前にもう一度法王にお礼を言った。「我々は二つの国の非常に強力な関係を期待しています。」www.lusnews.com, July 10, 2009.

オバマ政権はブッシュ前大統領とは違った法王との関係を維持しながらも、ホワイトハウスとバチカンは尚も相互の政治的関係を持っている。

聖書の預言によると、世界的なスーパーパワーと復活した法王教の政治的協力関係は、歴史上かつて

なかった地球規模の統一に導くのである。彼らの政治的議題を拒否する者たちは経済的なボイコットに会い、終局的には死の恐怖に会うであろう（黙示録13章を参照）。米国とバチカンの強いきずなはこの預言の成就となるのであろうか？ (Last Generation, Vol.20 No2, page 28)

これはSDAにとって目を覚ます警報だ！

最近、私はG8サミットのためイタリアに行ったオバマについての記事をメールでもらった。彼は、法王と個人的な謁見をして、法王の最近の勅書の写しを贈呈してもらったという。法王は、このサミットのため、またオバマのためにだけ用意したという。SDAの預言理解と直接関わる10項目があるのでそれを挙げてみたい：

1. 地球政府。法王は世界を悩ましている諸問題を処理する「真の政治的権威」を呼びかけている (p67)
2. 政権一致。法王はこの新しい政治的権威は、霊的(宗教的)価値に基づいて決定する者でなければならない(5章)。
3. 法王が頭である。これらの霊的価値は他のいかなる宗教からも導き出されるものではない。なぜなら、「すべての宗教は同等ではない」からである(p55)。
4. 宗教、政治、経済。教会は、社会のあらゆる面に影響を与えなければならない。なぜなら、「神は公的な領域、特に文化、社会、経済、そして特に政治的面に位置を占める」からである(p56)。
5. 法律を強要する権力。この「政治的権威」は、世界中にその法律を強要する「本物の権威」を持たなければならない(p67)。

6. 売買のコントロール。この新世界支配の権力は、政府が富を分配する社会的方針を制定するであろう。
7. 労働組合の復活。労働組合は新世界秩序において「決定的な役割を果たす」権力が与えられなければならない (p23)。
8. 教会の目標。法王ベネディクト16世はこの勅書は、「宇宙的神の都」を建設するため、「人類家族の歴史の目標」を達成する助けとなる (p7)。
9. 宗教自由の再定義。「国家の政治に干渉」しないと主張するものの、法王は、「ローマ教会によって定められる霊的価値、法律に世界は従う意味の「自由」と再定義している (p9)。
10. 霊魂不滅。霊魂は不滅であるという非聖書的信条は、法王の議題であることが確実になった。「人間は、…神によって不滅の霊魂を与えられた神の被造物である (p29)。

『法王の富の分配と彼の『真の博愛 (Charity in Truth)』』は、去年オバマの選挙活動に多く見られたものと同じ議題である。その結果、ホワイトハウスは、ローマのインサイダー (内情に詳しい者たち) が、ホワイトハウスに対するアドバイスをこのように表現している：

『聖下 (法王) の勅書は、ホワイトハウスの感動 (熱意) のレベルを上げた。なぜなら、この二人の経済感と同じであることを感じないではいられないからである。…教皇の人類の問題に経済を中心においていることは、オバマの選挙活動のテーマを強く反響して、オバマはそれを実行しようとしているからである』と (Dan Gilgoff, Obama's Most Important Catholic Adviser, U.S./New & World Report, July 10, 2009)。

これが最新のニュースである！

終わりは我々が考えたより近いかもしれない。

● 上記の十項目は、一つ一つが黙示録13章と預言者E.G.ホワイトの驚くべき成就ではないだろうか？

● 変革を叫んで大統領になった前代未聞の黒人大統領、オバマは、前大統領ブッシュの発言をいよいよ実行するようだ。ブッシュ前大統領の発言は、「龍のように物を語る (黙示録13:11) までには至らなかった。「『国家が物を言う』とは、その立法および司法権の活動のことである」 (大争闘下161)。日曜休業令はいよいよ近づいているのではないだろうか？

● 愛国者法の制定—2004年10月2日

「大統領は、あらゆる非常事態において、神のもとにあるアメリカ市民の国家の遺産を保証するために必要ないかなる道徳的法令をも発布するであろう。『万人のための自由と正義とともに、神のもとにある1つの国』というのが我々の忠誠の誓いではないか？」 ※大統領は、議会を通さなくても緊急令を出すことができるのである。

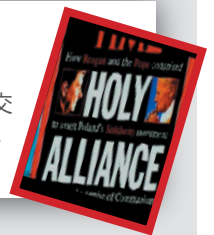


「時々、私は聖なる父の御前にいるときのことをどう表現したらいいか詩的な才を持ち合わせていない。それは、心ゆずられる経験である。タイムズ誌 2007-6/25、ブッシュの言葉



米国とバチカンの聖なる同盟
婚約成立！

「アメリカは1984年1月10日に完全な外交関係を樹立し、1世紀もひそかに続けてきた求婚を完了した」。ニューズウイーク



ブッシュ大統領の言葉

「真に偉人の一人、ヨハネ・パウロ2世に栄誉を与える最上の方法は、彼の教えをまじめに受けとめ、彼の言葉を聞き、彼の言葉と教えをこのアメリカにおいて実行に移すことである。」パトリシア・ザボアカトリック
ニュースサービス 2001/3/24

● 労働組合

「労働組合は、この世界が始まって以来かつてなかったような悩みの時をこの地球にもたらず代理機関の一つである。」—手紙200、1903年

「世界中の労働組合と連盟は、我々にとって畏である。兄弟達よ、それらから離れていなさい。一切関わりを持たないようにしなさい。これらの労働組合と連盟のために、やがて町での我々の施設の仕事は、大変困難なものとなるであろう。私の警告は、『町から逃れよ・・・』である。病院を町に建ててはならない。」—世界総会公報—1903年4月6日

オバマ氏、労組強化の大統領令、前政権の政策転換

【朝日新聞 2009/01/31】 <http://www.asahi.com/international/update/0131/TKY200901310047.html>

【ワシントン＝西崎香】オバマ米大統領は30日、労働組合の活動を支援する大統領令を出した。企業寄りが批判されたブッシュ前政権下での政策を転換し、労働政策を大きく見直す方針だ。勤労者ら中流・低所得層の生活水準を引き上げる政策を進めるための政府委員会も発足させた。

労組支援では「労働者組織に対する過去8年間の政策の多くを転換させる必要がある」と宣言。手始めに、連邦政府の公共事業に参加する企業に対し、社内で労組の活動をしやすくするよう定めた大統領令に署名した。

「労働運動は『問題』ではなく『解決策』の一部だ。強い労働運動がなければ強い中産階級も得られない」と強調。選挙中に労組支持を得た大統領は、労組が企業内で組織化を進めやすくなる法律の重要性を訴えてきた。議会で関連法案を審議する見通し。ただ、経済界や野党共和党は警戒感を強めており、政策論争が激しくなりそうだ。

オバマ大統領は、この日発表された昨年10～12月期の米経済成長率の落ち込みについて「勤労家庭の大難が続いている。雇用創出の必要がある」と述べ、「中流勤労家庭を支える対策委員会」の設立を発表。バイデン副大統領が担当し、成長産業の振興や教育・職業訓練を取り入れ、環境関連の「緑の雇用」も増やす計画だ。



世界の労働組合

【サービス従業員国際労働組合】 Service Employees International Union:SEIU

SEIUは、アメリカ、カナダ、プエルトリコに組合員を有する米国最大の労組で、アメリカ全体の労組組織率が低下しつつある中で拡大を続け、組合員数は現在190万人に達している。組織する職種は100を超えるが、構成組合員の50%を占めるのは病院、介護施設、診療所、自宅ケア等で働く医療関係の労働者である。また、公共サービスに働く公務員、ビル管理サービスの清掃労働者など多岐に渡る。女性が多数を占め、移民労働者も多く、アフリカ系アメリカ人は組合員全体の20%である。300以上のローカルと25の州評議会がある。



↑ビートルズ

なぜ、こんな手のサイン?

↑前イエズス会総長
コルベンパツハ

秘密結社、イエズス会→イルミナチ→フリーメイソンのサインなのに!

このサインのもとに地の王たちは結集するのか?



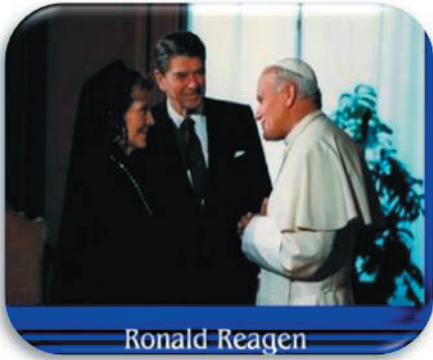
↑カリスマ伝道者たち↓



↑ベニー・ヒン



↑クーブランド



Ronald Reagan



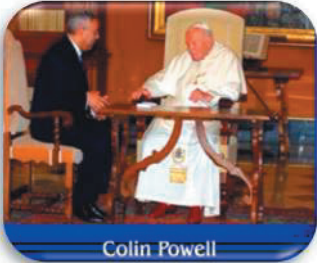
Bill Clinton



George H. W. Bush



Jimmy Carter



Colin Powell



この写真を見てください。ジョージ・ブッシュ(メソジスト)、父ブッシュ(長老教会)、クリントン(バプテスト)、ライス国務長官(長老教会)、プロテスタントの指導者たちが法王の死体にひざまずいて祈っている。後ろにはローマの司教。1935年、あるイエズス会士は「アメリカはローマの膝元に屈するであろう」と言った。ワシントンD. C. では6千5百万ドルの建物がローマに献堂されていると言う。ワシントンD. C. は、リトルバチカンと言われているようだ。プロテスタントの子弟はカトリックの学校に。グラハムもカトリックの神学校から博士号を授与されている。



なぜ、地の王たちは、必ず黒衣を着て法王と謁見するのであろうか？
バチカンの外交儀礼になっている。

彼らが法王の上位を認めている証拠だそうだ。



何のために献堂されているか？
プロテスタントアメリカにおいて教会の教えを広めるために！
我々はここを合衆国のリトルバチカンとして見ている。
(ヨハネパウロ2世, Review Tribune, March 3, 2001)





聖書に見る礼拝と音楽の原則

賢者への言葉

ブライアン・ニューマン (Amazing Discoveries) DVDより
 翻訳 砂川 満

聖書に「鼓と踊りをもって主をほめよ」という言葉がある(詩150:1,4)。このような聖句は現代のセレブレーション礼拝を支持するものだろうか。どのように解釈すればよいのだろうか。ニューマン氏のメッセージは時にかなったものと思う。

音楽と礼拝の問題を、神の言葉と関連づけて考えてみたいと思います。神の言葉から最高の知恵が得られると信じるからであります。ご存知のように、今日、礼拝と音楽の問題は、大きな論議を呼んでいます。そして、聖書の誤った解釈が、どうやら論争の大きな要因となっているようなのです。礼拝と音楽の問題について、聖書は本当に何を教えているのでしょうか。使徒行伝17章に、ベレヤのユダヤ人についてこう記されています：

「ここにいるユダヤ人はテサロニケの者たちよりも素直であって、心から教えを受け入れ、果たしてその通りかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べていた」(使徒17:11)。

セブンスデー・アドベンチストとして私たちが信じているすべての事柄は、神の言葉に根拠を置いていますよね。その事が信じられない人は、セブンスデー・アドベンチストではいられないはずです。ですから私たちは、すべての教理を神の言葉で実証できなくてはなりません。そして〔神への〕礼拝、すなわち私たちの宗教経験の本質的な部分に関する私たちの教理も、神の言葉に根拠を置いていなくてはならないのです。もしそれができなければ、私たちはみことばに基づいた民とはなり得ないのであります。セブンスデー・アドベンチストの重要教理である安息日や死者の状態などに関する聖句についても同様であります。文脈から外れて読めば、神が本当に教えておられることは全く反対の教理を導き出すこともあり得ます。礼拝と音楽についても、それらについて述べられている聖句を正しく読めば、そこに教えられている事柄と教えられていない事柄とを見極めることができると思います。初めに、ア

モス書5章21-23節を読んでみましょう。おそらくアモス書が書かれた時代は、イスラエルの子らにとって最も暗い時代であったと言えるのではないのでしょうか。次から次へと背教が起きました。人々は神から遠のいてしまいました。互いの愛情は冷えきっていました。大多数が自己中心になっていて、他者のことを思いやらなくなっていました。当時、神の礼拝に、異教の哲学、思想が混ぜ合わされてしまいました。アモスはここで、イスラエルの子らに対する神のお告げを記しています。

「わたしはあなたがたの祭りを憎み、かつ卑しめる。わたしはまた、あなたがたの聖会を喜ばない。たとえあなたがたは燔祭や素祭をささげても、わたしはこれを受け入れない。あなたがたの肥えた獣の酬恩祭はわたしはこれを顧みない。あなたがたの歌の騒がしい音をわたしの前から断て。あなたがたの琴の音は、わたしはこれを聞かない」(アモス5:21-23)。

ここで神がイスラエルの子らに述べておられる御言葉は、礼拝行為に関するものでした。ご自分に捧げられた犠牲の供え物や音楽は、神にとって極めて不快なものであると言っておられます。明らかに、イスラエルの子らが神に捧げていたこれらの〔礼拝〕行為の何かが間違っていたと言えましょう。彼らは背教して異教の礼拝にのめりこんでいたにもかかわらず、なおも自分たちは神を礼拝していると考えていたのです。なぜなら神が、「たとえあなたがたは燔祭や素祭を〔わたしに〕ささげても、わたしはこれを受け入れない」と言っておられるからです。どうやら、神を礼拝するのに、正しい方法と間

違った方法があるようです。アモス書のこの聖句は、その事を明示しているものの典型ではないでしょうか。神のおっしゃるところによると、何らかの原因で、彼らの行為が神にとって極めて不快なものとなっているのです。そこで私たちが自問すべきなのは、今日でも正しい礼拝方法と間違った礼拝方法があるのだろうかということです。では、別の問いかけをいたしましょう。私たちがどのように礼拝すべきかを決めるのは、いったい誰なのでしょう。私が神の御前に出て、神を礼拝し、御名を賛美するにあたって、そのやり方を礼拝する側の私が決めて良いのでしょうか。それとも礼拝される側の神が、どのようにそれがなされるべきかを決めるのでしょうか。その答えが分かれば、今日私たちが直面している礼拝と音楽に関する問題そのものを解く重要な鍵を見つけたこととなります。礼拝の方法を決めるのが神であることが分かれば、しばしば自分勝手な見解や好みに左右される人間の知恵から離れ、神に向かって、「主よ、あなたが私たちに望んでおられる礼拝とはどのようなものですか？」と問いかけるようになることでしょう。

音楽の問題について、聖書は決して沈黙していません。創造の直後のことが、ヨブ記に描かれています。「かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」(ヨブ38:7)。神の創造のみわざを見て、天使や他世界の住民らは、音楽をもって神を賛美したわけです。

聖書を読んでいくと、神の民の歴史上、特に重要な出来事において、常に音楽は極めて重要な役割を果たしていたことが分かります。例えば、出エジプト記15章において、紅海を横断した直後、エジプト軍との闘いに勝利したのを祝して、音楽が演奏されました：

「そのとき、アロンの姉、女預言者ミリアムはタンバリンを手に取り、女たちも皆タンバリンを取って、踊りながら、そのあとに従って出てきた」(出エジプト15:20)。

詩篇においては、ダビデが感謝や喜びや疑いの気持ちなどを歌で表現している様子が記されており、無論、礼拝でも音楽が重要な位置を占めていました。ルカ19章には、イエスがロバの子に乗ってエルサレムに入場されたとき、弟子たちが声高らかに神を賛美したと書かれています(37節)。イザヤ35章10節を読むと、贖われた者たちが歌つまり音楽をもって彼らの喜びを表すとあります。また、ゼパニヤ

書には次のような聖句もあります：「あなたの神、主はあなたのうちにいまし、・・・あなたのために〔歌をもって一欽定訳〕喜び楽し」まれる(ゼパニヤ3:17)。いつの日か、私たちは天使たちの合唱を聴く特権にあずかるでしょう。さらに、ガラスの海の上に立ち(黙15:2一欽定訳)、天の聖歌隊の一員として、モーセの歌と小羊の歌を歌う特権にあずかるならば、喜びもひとしおでありましょう。そしてさらに、創始者であり完成者であられるお方、アルファでありオメガであり、初めてあり終わりであるお方が、贖われた者たちのために喜びの歌を歌われる声を聴くことは、最高の特権また祝福となりましょう。

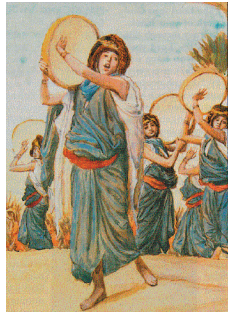
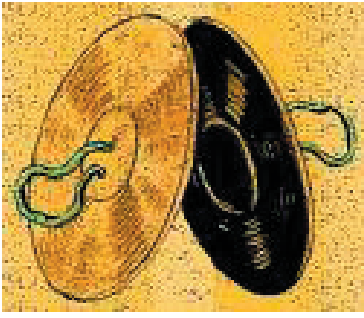
天地創造前のことになりますが、ルシファー自身も天の聖歌隊の指揮者でありました。後にこの世界に投げ落とされましたが、彼は私たち人間の思いに侵入して働きかけ、心を変えて神から離れさせる作用のある音楽を熟知していました。では、ルシファーが同様の目的で用いる音楽が今日も存在するでしょうか。「人類のあけぼの」に、音楽のもともとの目的が書かれています：

「音楽は聖なる目的のために用いられ、清く、気高く、高尚なことに人の思想を高め、魂のうちに、神への献身と感謝の念を起こさせた。こうした古代の習慣と、現在音楽が〔あまりにも〕しばしば用いられている方法との間には、なんと大きな相違があることであろう」(あけぼの下256-257)。

ここに述べられている「聖なる目的」というのは、聖書を読めば、神への礼拝、賛美であることが分かります。私たちの日常生活において、音楽を用いるべきではないということではありませんが、日常生活においてすら、「飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のために」することが求められているわけですね(1コリント10:31)。

ここで質問です。神は、ご自分の民の経験において、音楽の使用を認めておられるでしょうか？もちろん、認めておられます。事実、聖書の最も長い書は歌の歌詞で構成されています。詩篇や他の多くの書において、神は明らかに人性の芸術的な側面を支持しておられます。詩歌の形で真理を表現することを神は認めておいでになり、与えられた賜物を私たちが鍛錬し、洗練させるとき、神は栄光をお受けになるのです。

さらなる質問です。これまで提示された証拠をかんがみると、私たちがどのように神を礼拝すべきかについて、神ご自身がこだわりをお持ちだというの



**私たちがどのように礼拝すべきかを決めるのは、いったい誰なのでしょう。…
礼拝の秩序をお与えになり、民がどのように礼拝すべきかを決めたのは神でありました。**

は、理にかなった考えでしょうか？逆にこのような考えもありますね。私たちがいかなる音楽や服装、また礼拝方式でもって神に近づこうが、心をご覧になる神は、無条件で私たちを受け入れてくださる。これは正しいでしょうか、それとも間違った考えでしょうか。確かに神は心をご覧になるお方であり、無知を大目に見られることもあります。しかし、人はクリスチャン経験を重ねるにつれて成長すべきであり、神は私たちの成長に応じて、段階的に真理の光を注いでくださいます。さらに私たちの生涯は、受けた光に従うことによって成長の一途をたどるのであります。礼拝と音楽の問題も、同様の原則が当てはまると考えられます。

次に申命記12章から、興味深い聖句をいくつか紹介していきたいと思えます。古代イスラエル人が荒野で生活していた頃、神は礼拝についても、彼らのなすべき方法となすべきでない方法を教えられました。今日の私たちにも当てはめられる教えであると、私は考えています：

「あなたがたは、あなたがたの神である主を、彼ら〔異教徒たち〕のやり方で礼拝してはならない」
(申命記12:4)。

神は、ご自分の民が主を礼拝するか否か、あるいはどの神を拝むかを気にしておられただけでなく、異教徒らが彼らの神々を拝んでいた方法で主を礼拝してはいないかということも気にしておられたようであります。次に、同じ章の後半部から読みます：

「あなたは自ら慎み、彼らがあなたの前から滅ぼされた後、彼らに倣って、畏にかかってはならない。また彼らの神々を尋ね求めて、『これらの国々の民はどのようにその神々に仕えたのか、わたしもそのようにしよう』と言ってはならない。あなたの神、主に対しては、そのようにしてはならない」
(申命記12:30-31)。

これらの聖句を踏まえての質問です。神の民がどのように主を礼拝すべきかを決めるのは神ご自身でしょうか、それともそれは民に任せられているのでしょうか？決定権は誰にありますか？神ですよ。申命記12章にそのガイドライン〔指針〕が示されているわけです。世に出て行き、世の人々を見て、「彼らのやり方が気に入った。あのやり方を私たちの教会にも取り入れよう」と言うてはならないと、神は教えておられるのです。あるいは、別の理由が挙げられるかもしれません。「私たちの礼拝形式を、もっと一般受けのするものにしよう」。または、「未信者の気に入るようなやり方で礼拝し、世の人々がもっと教会に来やすくなるようにしよう。そのためには、世の人々が好むスタイルの音楽を教会に取り入れなければ」といった具合にです。もしそのようなアイデアを実践したならば、いつしか世俗が礼拝式全体を支配するようになることでしょう。世の方法に倣って礼拝を行うならば、それが当然の結果となるわけです。ですから、前の質問に戻ることが極めて重要になります。礼拝方式は神によって決められるのでしょうか、それとも人が決めるのでしょうか？証の書の言葉を一つ紹介します：

「地上の聖所の神聖さから、クリスチャンたちは、主がご自分の民と会われる場所をどう考えたらよいか〔どのようにみなすべきかを〕学ぶことができます。…昔の人々が、聖なる礼拝のうちに神にお会いする聖所に対して持っていたような崇敬の念は、ほとんどなくなってしまっています。しかし、神ご自身が、礼拝の秩序を与えられ、それをこの世の何ものにもまさって高められたのです」
(家庭の教育589-590)。

繰り返しになりますが、礼拝の秩序をお与えになり、民がどのように礼拝すべきかを決めたのは神でありました。興味深いことに、神は「それをこの世の何ものにもまさって高められた」とあります。現代においても言えることですが、古代イスラエルの時代にも、神の民が背教したときには決まって、礼拝の秩序がこの世のレベルにまで低められました。

そうすると、私たちが日常生活において経験する俗事と、教会での宗教経験の間には、何の違いもなくなります。ですから、私たちが教会で神にささげる礼拝は、日常の俗事とかけ離れた特別なものでなくてはならないのであります。ついでに、聖書をさらにひもといて、イスラエルの子らの礼拝経験についてもう少し学んでみましょう。歴代志下の29章を読むと、神が礼拝全体をつかさどるお方であるという真理を確立する御言葉に出くわします。ヒゼキヤ王は、神の民を正しい礼拝形式へと戻すことに尽力していました。

「王はまたレビびとを主の宮に置き、ダビデおよび王の先見者ガドと預言者ナタンに命じて、これにシンバル、豎琴および琴をとらせた。これは主がその預言者によって命じられたところである」(歴代下29:25)。

レビびとが宮に配置されたことや、彼らに楽器が持たされたことまでも、すべて預言者を通して主が命令なさったことでした。この点について、聖書の証拠は反論の余地がありません。聖書によれば、神の民がどのように礼拝すべきかを決めたのは、神ご自身でありました。さらに、聖所の研究をするならば、礼拝と音楽に関する貴重な教訓も学ぶことができます。聖所の務めを行った人々はレビびとの中から選ばれたわけですが、宮で音楽を演奏した人々も同様に皆レビびとでした。ダビデの治世に宮で賛美を担当した人の数まで記録されています。

「四千人は門を守る者となり、また四千人はさんびのためにわたしの造った楽器で主をたたえよ」(歴代上23:5)。

この聖句から、現在の状況と経験に当てはめて、今日の私たちは何を学ぶことができるでしょうか。教会では、牧師や長老だけが礼拝の音楽を担当すべきであるということではありません。しかしながら、礼拝において会衆の賛美をリードし、神にささげる音楽を演奏した人たちは、神にささげられた〔聖別された〕人たちでした。事実、イスラエルの民全体が、特別な大義のために特別に選ばれ、聖別された人たちの集合体であったわけです。彼らは、神のための特別な働きを遂行するために、世から分離させられたのでした。そして特にレビびとは、主の聖職にあずかる者として聖別された人たちであり、無論、礼拝の音楽を担当した人たちもその中に含まれていました。ですから神にとっては、礼拝式を受け持った人たちが、神との密接な関係を保っていることが重要でありました。最も大事な点ですね。今日も、礼拝と賛美をもって主の御前にやってくる人たちが、神との密接な関係を築いていなければ、霊とまこと

とをもって主を礼拝することは、実質上できないのです。それこそ、礼拝をささげるにあたっての第一の必要条件であります。神との関係を築いていなければ、神についての観念は自己とその欲求に基づいたものとなり、従って、霊とまことをもって神を礼拝することは不可能になるわけです。興味深いことに、特に最終時代の神の民は「王族の祭司」と呼ばれています(Iペテロ2:9 欽定訳)。私たちは、神のみかたちを反映する祭司として、王なる主から聖別されるのです。そして、神のみかたちは私たちのささげる礼拝においても同様に反映されるようになるのです。なぜならそれは、この世の何ものにもまさって高められるようになるからであります。

また、聖所で音楽を担当した人たちは、自分の好みの音楽を勝手に演奏したわけではありませんでした。彼らは、楽器や声でもってどのように礼拝すべきかについて明確な指示を受けていました。歴代志上25章からお読みします：

「これらの者は皆その父の指揮の下にあって、主の宮で歌をうたい〔音楽を奏で一欽定訳〕、シンバルと豎琴と琴をもって神の宮の務めをした」(歴代上25:6)。

これまで紹介した二つの聖句の中に、常に聖所の礼拝で用いられた三種類の楽器が記されています。シンバルと豎琴と琴でした。この事には少し後で触れますので、一応、これら三種類の楽器を念頭に置いてください。今度も、歴代志からお読みします：

「レビびとの氏族の長であるこれらの者は歌うたう者であって、宮のもろもろの室に住み、ほかの務めはしなかった。彼らは日夜その務めに従事したからである」(歴代上9:33一部欽定訳)。

この聖句から分かるように、彼らは音楽の働きに全くささげられた人たちでありました。今日に当てはめるならば、賛美歌礼拝のソングリーダーであれ、礼拝の特別賛美歌であれ、私たちのささげる賛美、音楽は、最善のものでなければならぬということではないでしょうか。

もう一つ、歴代志からお読みします：

「ダビデと軍の長たちはまたアサフ、ヘマンおよびエドトンの子らを勤めのために分かち、琴と、豎琴と、シンバルをもって預言する者にした」(歴代上25:1)。

歴代志を読むと、聖所の務めに用いられた楽器として、いつでもシンバルと豎琴と琴が言及されています。実は、もう一つだけ言及されている楽器があるのですが、それについては後で説明致します。今回私が礼拝における音楽について語り、聖所の務めに用いられていた楽器を取り上げた趣旨は、今日の私たちもこれらの楽器だけを礼拝に用いるべきである、と申し上げるためではありません。しかしながら、イスラエルの子らは他にも様々な楽器を使用していたことを示す聖書の記述を引用して、今日教会で演奏されているどんな音楽でも正当化しようとする人たちがいるので、ここでは、礼拝における楽器の使用についての誤りを指摘すると同時に、別の視点を紹介したいと考えているわけです。

先ほどから、シンバルと豎琴と琴が聖所で用いられたことについて話していますが、ご存知のように、豎琴と琴は弦楽器でありまして、どちらも似たような外見をしていました。地上の聖所は、一つひとつの備品を含め、すべてが天の聖所の型つまり模型であり、贖いの計画における現実の事柄〔実体〕を表していたことはご存知ですよね。しかし当時、聖所で用いられていた楽器もまた、天の聖所の象徴あるいはコピー〔複製〕であったという事実には、ほとんどの人が気付いていません。天の聖所で天使たちが賛美の合唱をささげるとき、伴奏に使われる楽器は何でしょうか？豎琴〔ハープ〕ですね。つまり、弦楽器であります。弦楽器というのは、弦をはじいて鳴らす楽器であり、和声的に人間の声と非常に相性がいいと言われていています。故に、弦楽器はしばしば伴奏に用いられます。勿論、天国のハープは地上のよりもはるかに豪華で音色も美しいはずですが、地上のハープは何らかの点で天のものに類似していると考えられます。同様に、聖所ではシンバルも用いられました。シンバルの記述は、詩篇や他の多くの箇所で見られます。通常シンバルは曲の拍子を取り、特に、曲が盛り上がるところで盛んに用いてクレシェンドを導きます。レビびとが聖所で用いたもう一種類の楽器は、ラッパ〔ホルンやトランペット〕でした。地上の聖所において、通常ラッパは、祭りや礼拝などの特別な行事、出来事を告げるのに用いられました。つまり、布告の手段でありました。時には歌や他の楽器と一緒に用いられることもありましたが、ラッパを吹き鳴らす主な目的は、あくまで民衆に告げ知らせるためでした。聖書の中で、ラッパが天で用いられているときの記述を読むと、やはり同様の目的で用いられていることが分かります。コリント人への第一の手紙とテサロニケ人への第一の手紙に描写されていますが、キリストの再臨の時に、その出来事を告げ知らせるのに使われ

る楽器は何でしょうか？ラッパですね。ヨハネの黙示録には七つのラッパについての預言があり、ラッパが吹き鳴らされて、各々の事件を布告しています。

次に、イスラエルの子らによって用いられたもう一種類の楽器について述べたいと思いますが、この楽器が聖所で用いられることはありませんでした。聖所でも用いられていたと主張する人たちもいますが、決して用いられてはいなかったことを聖書から証明していきます。この楽器は、イスラエルの経験において、合法的に用いられることがありました。何の楽器でしたか？ドラム〔太鼓〕やタンバリンといった類の打楽器です。従来のもは、今日のドラムやタンバリンとは多少異なっていました。手に持ってたたく楽器でした。では、ここで尋ねるべき質問は、この楽器がいつ、どこで、どのように用いられたかということであります。まず強調しておきたいのは、この楽器を用いるのは合法〔正当〕であったということと、ドラム自体は邪悪な楽器ではないという点です。そして、神はどのような場合にその楽器の使用を正当化なさったのかを知ることができれば、今日の状態に正しく当てはめることができるわけです。

では、ドラムが用いられた例を、聖書のどこに見出すことができるのでしょうか。ちなみに聖書の教理は、提示の仕方でも正反対の見解を説くことも可能ですね。例えば、一見、靈魂不滅説を正当化しているような聖句もあるわけです。実際に、聖書の中の一節だけを使って、神の教えとは全くかけ離れた宗教を作り出すこともできます。音楽についての聖句を見ていくにあたり、礼拝にまつわる明確な指示や教えを与えている聖句もあれば、単にイスラエルの子らの経験を物語っている聖句もあれば、礼拝に関する教えとは無関係な聖句もあります。そういった部類分けをしたいと思うのです。特に、ドラムの使用について見ていきます。正しい聖書解釈法を用いて、聖書的分析を行っていきましょう。最初の部類から見っていきます。

1. ラバンが言及した(送別の)手鼓—創世記31:27

逃げ出したヤコブに追いついたラバンが、ヤコブに向かって、出て行くなら出て行くと言ってくれば、手鼓や琴を演奏して祝ってあげたのに、と愚痴を言っているわけです。さて、この聖句から礼拝についての教義を引き出すことができるでしょうか。いいえ、これは礼拝とは関係のない出来事です。

2. 地が荒廃して静まった鼓の音—イザヤ24:8

これもまた、礼拝とは全く無関係の記述です。

3. ルシファーの鼓—エゼキエル28：13

これは、神学者の間でも論議を呼んでいる聖句でありまして、日本語の聖書では、楽器として訳されてもいません。いずれにしても、礼拝とは無関係の記述です。

4. イスラエルの回復—鼓—エレミヤ31：4

5. 手鼓やその他の楽器を演奏している預言者たちに会うサウル—サムエル上10：5

サムエルがサウルに油を注いだ後、しるしの一つとして、預言者の一団に会うと述べたところです。預言者たちは、手鼓やその他の楽器を演奏していました。これはイスラエルの子らの経験の一つであり、現代に字義通りの適用を加えることはできません。この状況や描写を経験上知る由もない私たちが、この聖句から何らかの教義を引き出すことは、危険であると言わざるを得ません。

上の五項目を、無作為という部類に入れたいと思います。なぜなら、これらの聖句は、礼拝についての特別な教義を与えてはいないからです。

次の部類に入れられる聖句は二つだけです。

1. イスラエルの偽の礼拝—鼓—イザヤ5：12

2. エルサレムに契約の箱を持ち込もうとしたダビデの第一の試み—手鼓—歴代上13：8

興味深いのは、偽の礼拝という背景でドラムが用いられていたことと、エルサレムに契約の箱を持ち込もうとしたダビデの第一の試みは、〔第二の試みとは異なり〕神の意思に反していたという点であります。これら二つの聖句は、神の指示に反した不従順の例と言えるでしょう。

三つ目の部類に進みます。

1. 紅海の横断—出エジプト15：20—21

紅海を渡った後、ミリアムや他の女たちが、勝利の喜びのあまり、タンバリンを取って踊りました。よく知られている箇所です。

2. 戦いに勝利したダビデとサウルをたたえる女たち—サムエル上18：6—8

女たちが手鼓を持って踊りながら「サウルは千を撃ち殺し、ダビデは万を打ち殺した」と言ったために、サウルのねたみを引き起こしましたね。

3. エフタがアンモンを打ち破った後、鼓と踊りで彼を出迎える娘—士師記11：34

エフタは、もし戦いに勝ったら、家で最初に自分を出迎える者をはん祭としてささげるといふ誓願を立てていました。何と、最初に彼を出迎えたのは、彼の娘でありました。彼はその誓いを果たさねばなりませんでしたが、実際に祭壇で娘をいけにえとしてささげたわけではありませんでした。文脈と証の書をよく読めば、娘は主の御用のために生涯聖別されたということです。生涯結婚することなく、処女であり続けたわけです。とにかく、ここで留意したいのは、戦いの後に、エフタの娘が鼓と踊りで彼を出迎えたという点です。

4. アッシリアとの主の戦い—鼓—イザヤ30：32

5. 戦いの歌—手鼓—詩篇68

6. 鼓と踊り〔ダンス〕—詩篇149, 150

ここでまた質問です。これまで紹介したすべての聖句に共通するものは何でしょうか？これらすべては、旧約聖書の聖句であるということです。いかなる状況、背景であれ、ドラムの使用に関する聖句は新約聖書の中に一つもありません。旧約聖書に記されているこれらの聖句は、私たちに何を示し、教えているのでしょうか。また、三つ目の部類の中で共通するものは何でしょうか？戦闘です。ところで、これらの聖句は、現代の教会においてダンスやドラムの使用を正当化するのにしばしば用いられています。しかし私たちは、自分たちの立場や行為を正当化するにあたり、聖句を正当に用いているのでしょうか。これらの聖句においてドラムが用いられているのは、世俗的背景つまり戦争という特別な状況下でありました。そして常に戦いの勝利と関係していました。もう一つ確認したいのは、誰がドラムを演奏していたかという点であります。常に女性でありました。女性が聖所で音楽を演奏することがありましたか。いいえ、女祭司というのはいませんでした。故に、これらの事件は聖所で起こってはいませんでした。また女性がドラムを演奏した理由は、通常男性は戦いに参加していたからでした。男たちが戦いに勝利して帰ってくると、留守をあずかっていた女たちが、ドラムと踊りで出迎えたわけです。今日の私たちが、何千年も前に特別な状況下で行われた事を取り上げて、現代の状況にそのまま当てはめるといふのは、私には正当でないように思われます。しかもその特別な状況というの、文字通りの戦争でありました。新約時代以降、神がご自分の民を戦争へと駆り立てた記録はありません。聖所でドラムが

使用されなかったもう一つの理由は、ドラムが異教徒にとって偶像と化していたからでした。事実、ドラムはイスラエルの周辺国の象徴として使われていました。申命記の御言葉を憶えていますか。「あなたがたは、あなたがたの神である主を、彼ら〔異教徒たち〕のやり方で礼拝してはならない」（申命記12:4）。異教徒にとって、ドラムは太陽神という究極の神格を表していました。ドラムのピンと張った皮は、臨月の母親の張り詰めたお腹を表しています。そのルーツはニムロデとセミラミスの時代にまでさかのぼります。ニムロデの死後、妻のセミラミスは不倫の子を宿したときに、太陽神となった夫によって身ごもったと主張しました。そして、その子を太陽神の生まれ変わりとして神格化したわけです。以来、ドラムは太陽神を表すものとして崇拝の対象となり、偶像化しました。ですから、異教徒の間で偶像として拝まれていたドラムが聖所で用いられなかったという事実は、驚くにあたらないと思うのです。戦いの勝利という世俗的背景においてドラムを用いるのは、いたって正当なことでした。が、神聖な礼拝においてドラムを用いるのは、正当なこととして認められていませんでした。

今日、礼拝でドラムを用いることを正当化するの最もよく使われる聖句が、詩篇149篇と150篇であります。これらの聖句を読む前に、質問したいことがあります。皆さんが誰かの結婚式の賛美歌を選ぶとしたら、どの歌を選びますか。結婚式用の賛美歌として、「命のきずなの断たる日はあらん・・・」という歌を選びましょうか。たとえ賛美歌であっても、それぞれの状況や場合に合わせて選曲しますよね。さて、詩篇はヘブル人の賛美歌集でした。それぞれの詩篇の背景を知ろうと思うならば、どのような言葉が使われているかを見る必要があります。詩篇149編を読んで、どのような背景でこれが歌われたのか見ていきましょう。

1節:主をほめたたえよ。主にむかって新しい歌をうたえ。聖徒のつどいで、主の誉を歌え。

聖徒の集いを教会すなわち礼拝の場と考える人たちがいますが、これは、神の民が集まるいかなる場所や場合をも網羅しています。

2節:イスラエルにその造り主を喜ばせ、シオンの子らにその王を喜ばせよ。

3節:彼らに踊りをもって主のみ名をほめたたえさせ、鼓と琴とをもって主をほめ歌わせよ。

6節:彼らの口の中で神を高らかに讃えさせ、手には両刃の剣を持たせよ（欽定訳）。

7節:これはもろもろの国にあだを返し、もろもろの民を懲らし、

8節:彼らの王たちを鎖で縛り、彼らの貴人たちを鉄のかせで縛りつけ、

9節:しるされたさばきを彼らに行うためである。これはそのすべての聖徒に与えられる誉である。主をほめたたえよ。

これは結婚式の歌ですか。違いますね。鼓〔ドラム〕が出てくる他の聖句と同様に、この詩篇も戦いの歌なのです。章内の様々な表現を見れば、戦いの歌であることは明白です。149編の一部だけをとって今日の状況に当てはめ、礼拝の教義を作り上げるのは、決して安全でも賢明でもありません。

聖書にはもともと、章とか節といった区分けはなく、神学者たちの間では、詩篇149篇と150篇はもとと同じ歌であったということで見解が一致しています。では、詩篇150篇を見ていきましょう。

1節:主をほめたたえよ。その聖所で神をほめたたえよ。その力のあられる大空で主をほめたたえよ。

これは問題となり得る聖句です。なぜなら、「その聖所〔礼拝の場〕で神をほめたたえよ」とあり、同じ章に、「鼓と踊りとをもって主をほめたたえよ」とあるからです。ここの文言を理解しなければ、問題を抱えることとなります。復習になりますが、これまで**ドラムは、戦いまた戦いの勝利という背景で用いられていました**。少なくとも**149篇**は戦いの歌であります。ところが**150篇に入ると**、いきなり「聖所で神をほめたたえよ」となっているわけです。しかし、この箇所は別の見方をすることができまして、その見方のほうが正当であると私は考えています。ところで、聖書には聖所がいくつあると書かれていますか。天の聖所と地上の聖所の二つですね。言うまでもなく、イスラエルの子らが天の聖所に入ることはできませんでした。では、神の力のあられる大空とはどこのことでしょうか。原語であるヘブル語によると、大空とは神が住まわれる場所のことです。神が住まわれるのは地上の聖所ですか、それとも天の聖所ですか。ここで述べられている大空とは、神の政府の中枢のこと、言い換えれば御座のある場所のことです。つまり、神の力のあられる大空とは、天の聖所のことです。結局、詩篇150篇の1節は天の聖所について述べている聖句ですから、この聖句に基づいて現代の礼拝の教義を確立させることはできないのです。当時、イスラエルの子らは周辺諸国と戦闘を交えることがありましたが、それらの戦争は神の指



現代においても言えることですが、古代イスラエルの時代にも、神の民が背教したときには決まって、礼拝の秩序がこの世のレベルにまで低められました。私たちが教会で神にささげる礼拝は、日常の俗事とかけ離れた特別なものでなくてはならないのであります。

示の下でなされました。御旨に逆らって勝手に戦争を仕掛け、敗北を喫したこともありましたが、天の指示に従っている限り、それは主の戦いであり、主がイスラエルに勝利を与えられたわけです。民が戦いという特殊な形で主の御業を遂行して成功したときに、ドラムが演奏されました。今日でも、ドラム〔太鼓〕は、軍隊の行進で用いられる主要な楽器であり、いにしえから現代に至るまで戦闘の楽器として知られています。もしも私たちが、礼拝におけるドラムの使用は聖書で推奨されていると言って礼拝に用いるならば、それは全く不適切なことであり、極めて非聖書的であります。先ほども述べましたが、ドラム自体は邪悪な楽器ではありません。今日でも、ドラム〔太鼓やタンバリンといった類の打楽器〕を正當に用いることができます。

では、手をたたいたり、手を高く上げたりすること〔特にペンテコステ派の礼拝ではよく見られる光景〕に言及している聖句はどうでしょう。礼拝で手をたたくことについて述べられている聖句は、詩篇47篇1節だけあります。ここで「手をうち」と訳されているヘブル語は、必ずしも手をたたくという意味ではありません。楽器をたたくとか、ラッパを吹き鳴らすとか、礼拝で共に握手することによって、相手に仕えるという意味があります。手を高く上げることについてはどうでしょう。会衆が歌いながら手を上げ、前後左右に揺らす光景は、わが教会においてもますます顕著に見られるようになってきました。祈りと賛美をささげるときに、聖霊に促されて手を上げる場合もあると思いますので、聖霊の働きを批判したくはありません。が、聖霊の感動によるのではなく、流行と言いますか、群集心理に踊らされて行っている場合が多いように思われるのです。周りの人がやっているから自分も、といった具合です。手をたたくことに言及している聖句は他にもいくつかありますが、ヨブ記27章23節で手を鳴らす行為は、人を嘲る悪い振る舞いであることが分かります。哀歌2章15節もナホム書3章19節も同様の意味合いです。手を上げると訳されているヘブル語

は、字義通りの場合もあれば、比喩的な場合もあります。この言葉を比喩的に捉えると、神への祈りと嘆願をもって心を高めるという意味にもなり得るのです。聖句を見ていきましょう。詩篇28篇2節は祈りの言葉です。63篇4節も祈りです。そもそも、生き永らえる間手を上げるという表現を字義通りの意味と捉えることはできません。常に手を上げた体勢で生活することはできないからです。141篇2節も祈りです。143篇6節も祈りの行為です。哀歌3章41節は祈りと悔い改めの行為です。詩篇134篇1-2節も祈りの行為であります。改めて私が強調したいのは、聖句の字面だけをとりえて、そこに描かれている行為を自分の好む事柄に当てはめて、不適切に正当化すべきではないということです。ですから、私たちが好む行動を正当化するためではなく、まず礼拝そのものについての正しい原則を聖書から学ぶべきであります。なぜなら礼拝というのは、初めに行為ありきではないからです。礼拝というのは、どれだけ手をたたいたり揺らしたりすべきか、どれだけ楽器を演奏すべきか、といったものではありません。ややもすると私たちは、外見の形にこだわりすぎて、礼拝そのものの原則と礼拝の正しい動機を忘れてしまっていないでしょうか。

では、次の質問に移ります。神が与えておられる指示に従っていなくても、動機が正しければ、神は私たちの賛美と礼拝を受け入れてくださるでしょうか？先ほども言及した歴代志上の13章を見ていきます。エルサレムに契約の箱を持ち込もうとした、ダビデの最初の試みについてであります。

7節：神の箱を新しい車にのせて、アビナダブの家からひきだし、ウザとアヒヨがその車を御した。

8節：ダビデおよびすべてのイスラエルは歌と琴と豎琴と、手鼓と、シンバルと、ラッパをもって、力をきわめて神の前に踊った。

9節：彼らがキドンの打ち場に来た時、ウザは手を伸べて箱を押さえた。牛がつかずいたからである。

10節：ウザが手を箱につけたことによって、主は彼に向かって怒りを発し、彼を撃たれたので、彼はその所で神の前に死んだ。

12節：その日ダビデは神を恐れて言った、「どうして神の箱を、わたしの所へかいて行けようか」。

14節：神の箱は三か月の間、オベデ・エドムの家に、その家族とともにとどまった。主はオベデ・エドムの家族とそのすべての持ち物を祝福された。

先ほども述べましたが、この一連の出来事はすべて、神への不服従が招いた結果起こったものです。ウザが契約の箱に触れて死んだ事件だけが注目されがちですが、そもそもの問題はダビデの不服従に端を発していました。契約の箱はどのように運ぶ決まりでしたか。祭司らがかついで徒歩で運ぶことになっていました。ところがダビデは速やかに事を済ませようとして、箱を牛車に乗せて運ばせたのです。新品の牛車で運ばせたところを見ると、彼の動機は悪くなかったかもしれません。そして運ぶ途中で牛がつかずき、悲劇が起きました。さらに契約の箱を運ぶときは、聖所の楽器を用いることになっていましたが、ダビデはその決まりにも従いませんでした。歴代志上15章をご覧ください。2ヶ月後に行われた、契約の箱をエルサレムに運ぶ二度目の試みです。

12節：〔ダビデは〕彼らに言った、「あなたがたはレビびとの氏族の長である。あなたがたとあなたがたの兄弟はともに身を清め、イスラエルの神、主の箱をわたしがそのために備えた所にかき上げなさい。

13節：さきにこれをかいた者があなたがたでなかったの、われわれの神、主はわれわれを撃たれました。これはわれわれがそのためにしたがってそれを扱わなかったからです。」

この聖句は、契約の箱を運ぶ第一の試みに、レビびとが加わっていなかったことを示しています。そして彼は、前回神の定めに従わなかったことを認めています。ですから、契約の箱をエルサレムに持ち込むための第一の試みが神のご計画に従ってなされなかったことは明らかであります。15章を続けて読みます。

16節：ダビデはまたレビびとの長たちに、その兄弟たちを選んで歌うたう者となし、豎琴と琴とシンバルなどの楽器を打ちはやし、喜びの声をあげ

ることを命じた。

28節：こうしてイスラエルは皆、声をあげ、角笛を吹きならし、ラッパと、シンバルと、豎琴と琴をもって打ちはやして主の契約の箱をかき上った。

今回は、聖所の楽器だけが用いられました。なぜなら、二度目にこの作業に携わったのはレビびとだけだったからです。最初の試みと比較すると、手鼓すなわちタンバリンがなくなっています。一度目は聖所の決まりに従って行われず、二度目は決まりに従って行われました。先ほどの質問を繰り返します。神が与えておられる指示に従っていなくても、動機が正しければ、神は私たちの賛美と礼拝を受け入れてくださるのでしょうか？聖書の証拠から、「いいえ」と答えざるを得ません。もし私たちの動機が本当に正しく、私たちの心が正しい状態にあるならば、私たちは神のご計画と方法が何であるかを真摯に尋ね求め、それを行うことでしょう。これこそ、ダビデが学んだ教訓でした。同様に私たちも、神の教えを尋ね求めて見出す必要があります。

では、最後の質問です。神への礼拝に関連して、この聖書の証拠は私たちにとってどのような意味があるのでしょうか？セブンスデー・アドベンチストは、礼拝に関する特有の神学を持つべきでしょうか？それとも、他教派に合わせるべきでしょうか。第一に、私たちは礼拝の動機を知る必要があります。神はイスラエルの子らに天の礼拝形式に従うよう求められましたが、今日でも、ご自分の民が天の礼拝形式に従うよう求めておられます。いつの日か、天国で礼拝をささげるための備えをさせるためです。礼拝においても日常生活においても、世の習慣に倣ってそれを実践しているならば、どうやって天の礼拝や生活に備えるのでしょうか。天の聖所における礼拝の動機と態度については、聖書自体が教えています。ここで、礼拝と賛美をささげる四つの主な理由を挙げます。

- 創造（安息日）
- 神の贖いの計画（イエスの生命という犠牲）
- キリストのとりなし（大祭司として）
- 再臨（永遠の救い）

これらの四つは、正しく解釈されるならば、セブンスデー・アドベンチスト特有の教理を形づくるものとなります。正しく解釈されているということは、完全に聖書にのっとっているということであり、黙示録4章に、天国で行われる式典が描かれ

ています。これは、キリストが祭司職に就かれるにあたっての就任式であります。ですからこの式典は、今回のテーマ全体の根幹に関わるものとも言えます。二十四人の長老は、キリストと共によみがえらせられた初穂であります。この式典は、将来私たちが天国に行ったときに行われる式典〔礼拝〕のモデルなのです。長老たちは白い衣を着て、金の冠をかぶっています。

10節：二十四人の長老は、御座にいますかたのみまえにひれ伏し、世々限りなく生きておられるかたを拝み、彼らの冠を御座のまえに、投げ出して言った。

11節：「われらの主なる神よ、あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。あなたは万物を造られました。御旨によって、万物は存在し、また造られたのであります」。

長老たちの態度と言葉には、自我の全く含まれない謙遜さがうかがえます。次の章ではこのように宣言しています。

「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、わたした

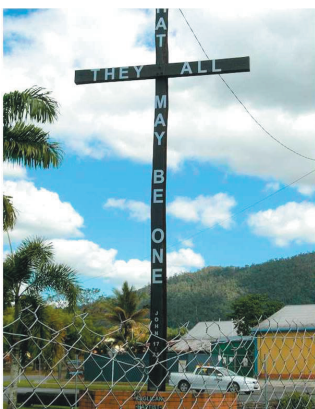
ちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました」(黙示録5：9-10)。

救いの計画の根幹がここに記されています。天の聖所における礼拝者たちの動機と態度に着目してください。全くの無我です。ただひとりのお方に焦点が当てられます。これが、今日の私たちがささげる礼拝の特徴となるべきであります。

最後の考察に入ります。礼拝は利己的行為ではありません。自分がそれからどれだけのものが得られるかを期待して、礼拝に臨むべきではありません。これでは、動機が完全に間違っています。また、私たちの標準が問われるべきではありません。ただ、神の礼拝計画に従ってすべてがなされるべきです。私たちは、神の御旨に従って礼拝にやってくるべきです。神のご計画に服従し、神の絶大な力とその最高権力を認めるときに、私たちは心へりくだり、聖なる喜びと賛美を喚起されます。そしてその結果、一時の感情や興奮を超越した祝福を受けるのです。真の礼拝とは、利己的な快感や興奮を与えてくれるものではなく、霊とまこととをもって行うときに、純粋な喜びを与えてくれるものなのです。私たちが、聖書的な動機と態度をもって神の御前に入る者となれますように。

NEWS

オーストラリア、クイーンズランド
道路の側に十字架が立っている↓



←近づいてみると、ヨハネ17:21の聖句が書かれている：「彼らが一つとなるためである。」



↑これらの教会が一つになることはイエスの祈りを成就する事だと思ったのであろう。イエスは真理によって彼らを聖別して下さいと祈ったのであるが・・・。

E. G. ホワイトは、1890年に言われた：「反キリストを尊敬すべきであろうか?...これこそまさに、盲目な献身しない者たちが我々を導こうとしているところである。」—CW95

2009年秋のセミナーの主要ポイント

わが教会に起こる最後の危機！

背教のオメガ

金城 重博

この記事はわが教会を非難するために書いているのではなく、最後の真の教会であることを認識して擁護するために書いているのである。

確かにS D A教会には変化が起こってきたのである。それはいつから起こったのだろうか？

1900年初頭、わが教会に大きな震動を与えた背教のアルファが起きた。非常に惑わされやすい危険な教えであったが、預言者がいたために難を免れた。その時、預言者E. G. ホワイトは、次のように言った。

「わたしは我が民に告げるように命じられた：ある人達は悪魔が次々と策略を練って、彼らが思いもしない方法でそれらを遂行することに気がつかない。サタンの代理者は、聖徒を罪人とする方法を案出するであろう。わたしは今言っておきたい。

わたしが死んでから、大きな変化が起るであろう。わたしはいつ召されるかはわからない。しかし、悪魔の策略に対して皆に警告したい。わたしの死ぬ前に十分に警告したことを我が民に知ってほしい。わたしはどんな変化が起きるかは特に知らない。しかし、サタンが永久化しようとする罪のすべてに注意しているべきである」 W・C、ホワイトによって送られた手紙、Elmshaven, 24, 1915: 「1888年再吟味p159」に引用。

S D Aの原則が変えられる

特別な証、シリーズB、#739~40. 1903. 10 (セレクトッド・メッセージ1巻204, 205ページ) :

「魂の敵は、セブンスデー・アドベンチストの間で大改革が起こるべきであるという仮説を持ち込もうとしてきた。この改革は我々の信仰の柱として立ってきた教理を放棄し、組織の再編成に従事することで成り立つというものであった。このようなことが起こったなら、その結果はどうなることで

あろう？ 神の知恵によって残りの教会に与えられた真理の原則が放棄されるであろう。我々の宗教が変えられるであろう。**過去50年間にわたり働きを支えてきた基本的原則が、誤りと見なされる**であろう。新しい組織が確立されるようになる。新しい種類の書物が書かれるようになる。主知主義 (intellectual philosophy) のシステムが取り入れられるようになる。このシステムの創設者が都市へ行き、目ざましい働きをするであろう。もちろん安息日は軽視されるようになり、それをお造りになった神も同じく軽視されるであろう。新しい運動を阻止しようと立ち上がるものは、何であっても許されないであろう。美德は悪徳にまさると指導者は説くが、神がとりのぞかれ、神なしでは何の価値もない人間の力に彼らは頼るようになるであろう。彼らの基礎は砂の上に立てられ、嵐が吹き荒れると、建物はひとたまりもなく倒壊するであろう。」

1SM269-270: 「『生ける宮』の中には、恐るべき**異端のアルファ**が提示されている。**オメガ**が続いてくるであろう。そして、神の警告に注意しない人々がこれを受け入れるであろう。」

Special Testimonies, Series B, No. 2, p16: 「惑わされてはいけぬ。多くが偽りの霊と悪魔の教理に耳を傾け、信仰から離れていく。今我々が直面しているのは、この危機のアルファであり、**オメガは最も恐るべき性質のもの**である。」

1SM203 (1904年) : 「わたしは、しばらくするとオメガが続くことを知っている。そして、わたしは我が民のために身震いした。」

スタディバイブル新 458 (Letter 55, 1886年) : 「教会は倒れそうになるかもしれないが、倒れることはない。それはシオンの罪人たちがふるわれるまで、穀と尊い麦がより分けられるまで存在する。これは恐るべき試練であるが、起こらなければならぬ。」

その預言が実現する時が来たのであろうか。

元レビュー・アンド・ヘラルドの編集長、ケネス・ウッドは「どうして我々はこうなったのか？」という論文を書いた。

「我が教会員の1人がくれた手紙の中によく表されている：『1956年まで教会の教えと理解はよく統一されていた。我々はみんな同じことを信じ、教えた。異なった立場を取る者は、なんらかの危惧の目で見られた。しかし、時代は確かに変わったのだ。』

教会の歴史を研究する多くの者は、今日の教会の教理的な分裂の根本的原因は、1950年代半ばのウォルター・マーチン、ドナルド・バーンハウスとの問答と、それに続く1957年の『教理に対する質問 (Questions on Doctrine)』の出版にあると指摘する。ある者は、それ以前の1950年のR. J. ウイーランドとD. K. ショートによって出版された『1888年再吟味』によると、1888年の使命の拒否に主な原因があるとする。また、ある者は、ロバート・プリンスミード (1960年代) による聖所覚醒運動を拒否したことに今日の神学的混乱の最も大きな原因があるとする。

私は最初のグループに属すると考える。なぜなら、エバンジェリカル (福音主義派) の人たちとの問答と『教理に対する質問 (Questions on Doctrine)』の出版が教会内に批評、疑い、不確かさ、うわさ、指導者への信頼の喪失という風潮を作り上げたと思っているからである」How We got Where We are”Kenneth, H. Wood. P2.

M. L. アンデレアセン (1876-1962) は、その当時の敬神深いトップの神学者であった。「教理に対する質問 (Questions on Doctrine)」が出版された時、それは、再臨信仰の土台をゆすぶるものと次のように嘆きの警告を発した。(彼は聖所研究の権威者として知られていた) :

「指導者たちが偽りの教理を強制し、反対する者を脅かそうとする危機がこの教団にやって来た。全く信じられない。何年も据えられてきた土台を取り除こうとする試みが今なされている。そうすることによって成功すると考えている。もし我々に預言の霊がなければ、今我々を脅かしているような健全な教理からの離脱を知ることができないであろう。わが教団を破壊し、ひどい傷をもたらすオメガの到来も知らないであろう」“How we got where we are”Kenneth. H. Woodに引用。P440.

1957年に「教理に対する質問 (QD)」が出版された時、下記の点において妥協したと言われている：

1. あがないは十字架で完成した。「最後のあがない」「特別なあがない」「特別な清め」が姿を消す。
2. キリストの性質—アダムが罪を犯す前の性質を取られたと変えた。
3. バビロンと残りの民—SDAだけが「残りの民」ではない。
4. 律法に服従する必要性と可能性をぼやかした。
5. 預言の霊の権威を希薄にした。

等々でSDAは「カルト」ではなく、キリスト教仲間であると認められた。それ以後「十字架ですべては終わった」というムードが教会にみなぎる。

特に第1の「最後のあがない」「特別なあがない」「特別な清め」は、ダニエル8:14 から発見 (発掘) されたセブンスデー・アドベンチスト再臨信仰の土台、基礎、中心的な柱である。それが福音派の神学者から攻撃され、あざけられた教理であった。1957年以来、キリスト教界の仲間に入れた、認められたことを喜び、SDAの特殊性、アイデンティティーを失っていく結果となった。昔、イスラエルが「友愛という名目の下」にミデアンと妥協したように。

その時蒔かれた種が実って、「過去20~30年の間に、SDA教会が公に表明する見解が大きく変化してきた」と言わしめたのであろう。

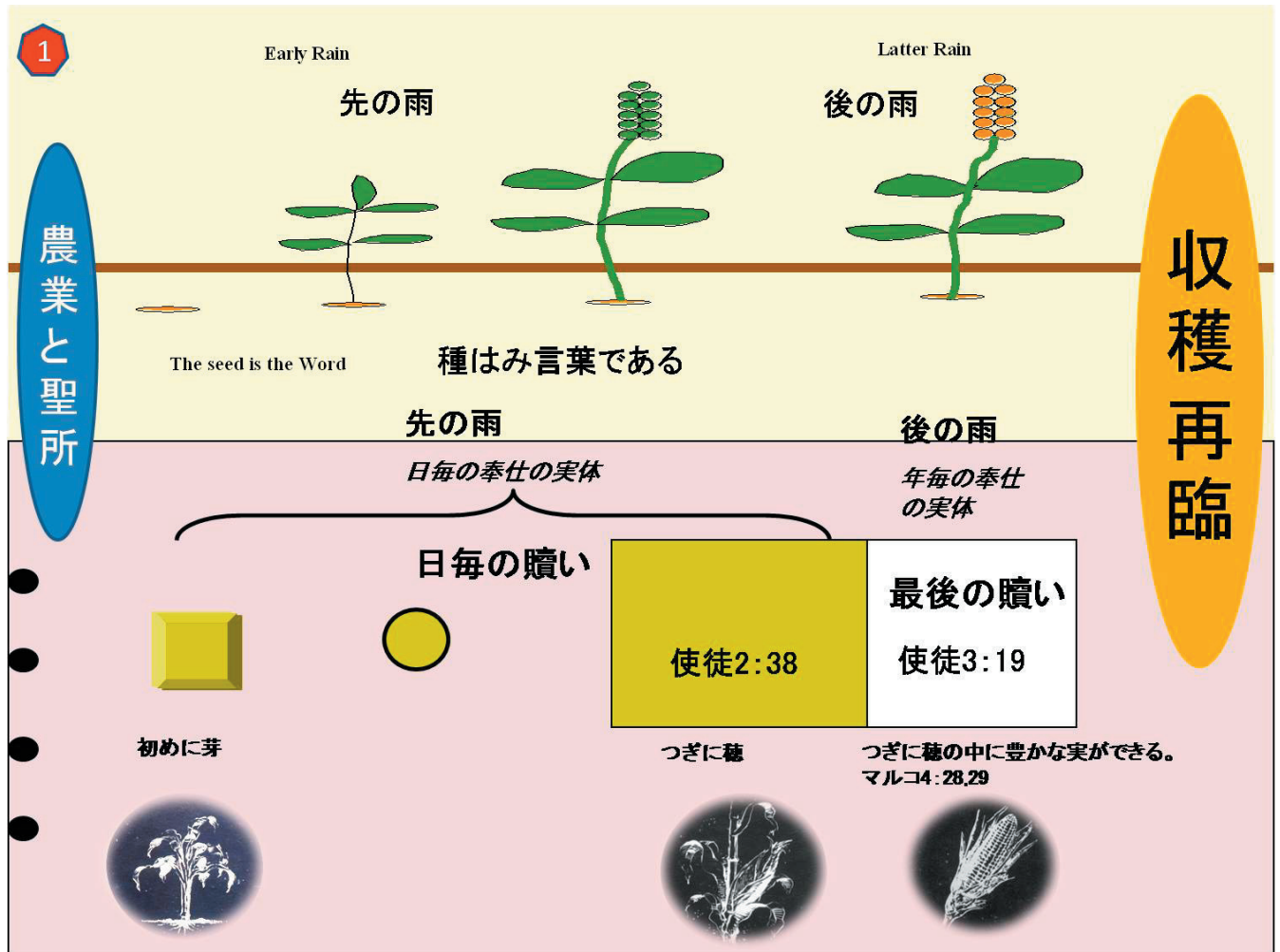
今年 (2009年) 秋のセミナーで学んだチャールズ・スミス先生の講義を簡単にまとめたい。彼は、今わが教会は背教のオメガの中にあると説いた。

主はわたしに答えて言われた、「この幻を書き、これを板の上に明らかにし、走りながらも、これを読みうるようにせよ」ハバクク2:2。

再臨運動の先駆者の一人、チャールズ・フィッチは、この聖句に基づいて、時に関するメッセージをチャートにして配布したことは有名である。そこで我々も「最もよく知っていなければならない大真理」をチャート化した。スミス先生の言わんとすることと私の言わんとするところが一つなのでチャートを合成してみた。

「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕え、われわれが最もよく知っていなければならない働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである」大争闘下221。

チャート1



- 聖所は**真理の全体系を明らかにしている**(大争闘下138)。それは「**福音がぎっしりつまった**」制度である(大争闘下260)。あがないは十字架で終わったのではない(大争闘下222)。天の至聖所で完成されるのである(大争闘下222)。だから「最後のあがない」「特別なあがない」「特別なきよめ」が必要なのである(初代文集440、413)。それが終わったら、キリストは収穫に来られるのである(黙示録14:14-20、大争闘下140、実物教訓47)

- 農業も同じ真理を表している。

マルコ4:28, 29:「地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。実がいと、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである。」

春の雨(後の雨)で実が実り熟すると収穫がなされる。

- 種はみ言葉である(1ペテロ1:23)。種は水に触れないと発芽しないように、心にまかれたみ言葉も聖霊に触れて発芽する。
- 新生が外庭の経験で、聖所の経験が日毎の成長、そして至聖所における最後の蒔い、後の雨(最後の聖霊降下)によって品性が完成する。

TM506:「季節の終わり近くに降る**後の雨は穀物を熟させ**、刈り入れに備える。…穀物が熟するということは魂の中に**神の恵みのみ業が完結**することを表している。聖霊のみ力によって**神の道徳的かたちが品性に完成される**のである。われわれは全くキリストに似た者に変えられる。…先の雨がその働きをしないならば、後の雨は完全の実を結ばせることはできないのである。」

実物教訓47「『実がいと、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである。』キリストは、ご自分の教会の

中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。」

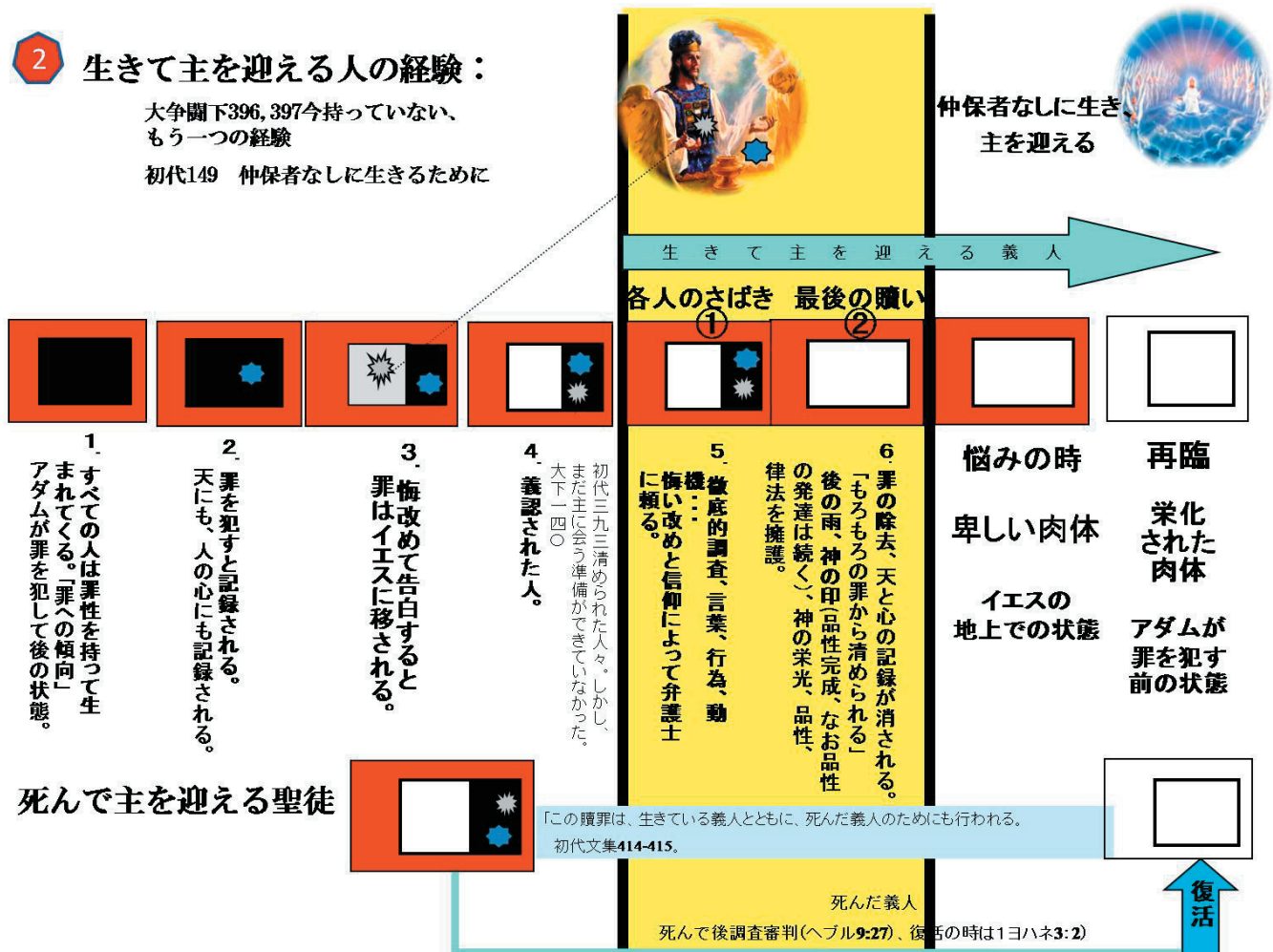
大争闘下140-141「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録14章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』（マラキ書3:4）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会』である（エペソ5:27）。また、その教会は、『しのめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である（雅歌6:10）。」

チャート2

2 生きて主を迎える人の経験：

大争闘下396, 397今持っていない、
もう一つの経験
初代149 仲保者なしに生きるために



- 人は外なる人と内なる人に分けられる（2コリント4:16；エペソ4：23；3：16,17；COR 78-80；4T606；2SM32）。 アダムが創造された当初は肉と霊において神の像にかたどって造られた。彼の機能（外なる人）は完全であった。その精神、霊（内なる人）も完全であった。
- 墮落したため、すべての人は退歩した肉体（外なる人）と罪深い心（内なる人）をもって生まれてくる（1コリント15：53；詩篇51：5；ローマ8：7；エペソ2:1-3；エレミヤ17:9）。

- 地上におけるキリスト
- 「キリストは、われわれがキリストと一つ精神になるために、われわれと一つ肉体になられた」2希望136。彼は弱められた能力と共に人のすべての組織、退歩した肉体を所有しておられた(ヘブル2:14-17; 1希望35,125; 5BC1130; 1SM267, 269)。彼の心と精神は罪がなかった(ルカ1:35; ピリピ2:5; ヨハネ14:30; 2T202)。
- 復活されたキリストは栄化された不死の肉体を持っておられる(ピリピ3:21; ローマ6:9,10)。
- 新しい心は完全に清められた心ではない(ヘブル6:1; 2コリント1:1; 7:1; ピリピ3:10-12; 4T496; 5T397; 4T55,56)。罪の記録が改心した人の心に残っている(エレミヤ17:1; エゼ36:31; 2希望8; TM447; キ実32,140,141; 3BC1158)。
- さばきと最後のあがないにおいて、最後の心のきよめが提供される(レビ16:30; マラキ3:1-3; 使徒3:19; エレミヤ50:20; ヘブル10:1-3; 14-18; あ上422-423,220; 大下393; 3SG135)。生ける者のさばきと後の雨が完全な清い状態にする(5T475; TM506)。
- 再臨の時に、聖徒達の朽ちる体が完全な不死の体に変えられる(ピリピ3:21; 1コリント15:53)。

チャート3

3

生ける者のさばきと最後のあがない

恩恵期間の終了

再臨

毎日のあがない
キリスト、我らの身代わり、
仲保者



さばきの標準



キリストの
罪なき品性



悪の知識
悪への傾向
サタンの品性
教育17, 21



最後のあがない
罪の除去



真に悔い改めた者の罪が、
ついに贖われて、天の記録
から消されて、もはや思い出
すことも心に浮かぶこともな
くなるように、象徴では罪は荒
野に追いやられ、会衆から永
遠に切り離された。あ上423

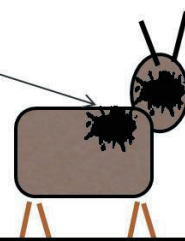
もう一つの経験
大争闘下378

仲保者なし
に生きる
大争闘下141

天の聖所におけるキリストのとりなしがや
むとき地上に任んでいる人々は、聖なる神
の前で、仲保者なしに立たなければならな
い。



救われた者の
品性の記録



レビ記を見ると、毎日の贖い(レビ記4章~6章)と年毎の贖い(レビ記16章)の二つに分けられている。

- 日毎に罪のゆるしと贖いを経験しているのに、どうしてレビ記16章においてまた、清めと贖いが必要なのだろうか? 「七月になって、その月の十日に、あなたがたは身を悩まし、何の仕事もしてはならない。この国に生れた者も、あなたがたのうちに宿っている寄留者も、そうしなければならない。この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」(レビ記16:29,30)。
- ① 聖所の概要については、あけぼの上第30章参照。
- ② クリスマン経験のステップについては、キリストへの道を参照(毎日の経験)。

③ 天の真の聖所とキリストの奉仕については、各時代の争闘下第23章、24章、28章を参照。

● 1844年から死んだ義人の調査審判と特別な清めが始まった。ダニエル7章、8章、9章を参照。

① 死んだ義人は死んで後、さばきを受ける（ヘブル9:27）。誰でも死んですぐ裁かれるのではない。その日は定められている（使徒17:31）。それはいつか？ ダニエル7章、8章の研究。

② 生きている者のさばきはいつから？ 黙示録13:8、14:7、大争闘下224、スタディバイブル新585（13:14-17の注解を参照）。

● 調査審判の目的は何か？

● 大争闘下216、217、最終的な贖罪、罪の除去のため。大争闘下218、初代410、413、国指下193-196、大争闘下378

調査審判だけであれば福音ではない。

● 死なないで、生きて主を迎える特別な備え。大争闘下141

● 仲保者なしで主の前に生きる。大争闘下141、初代149

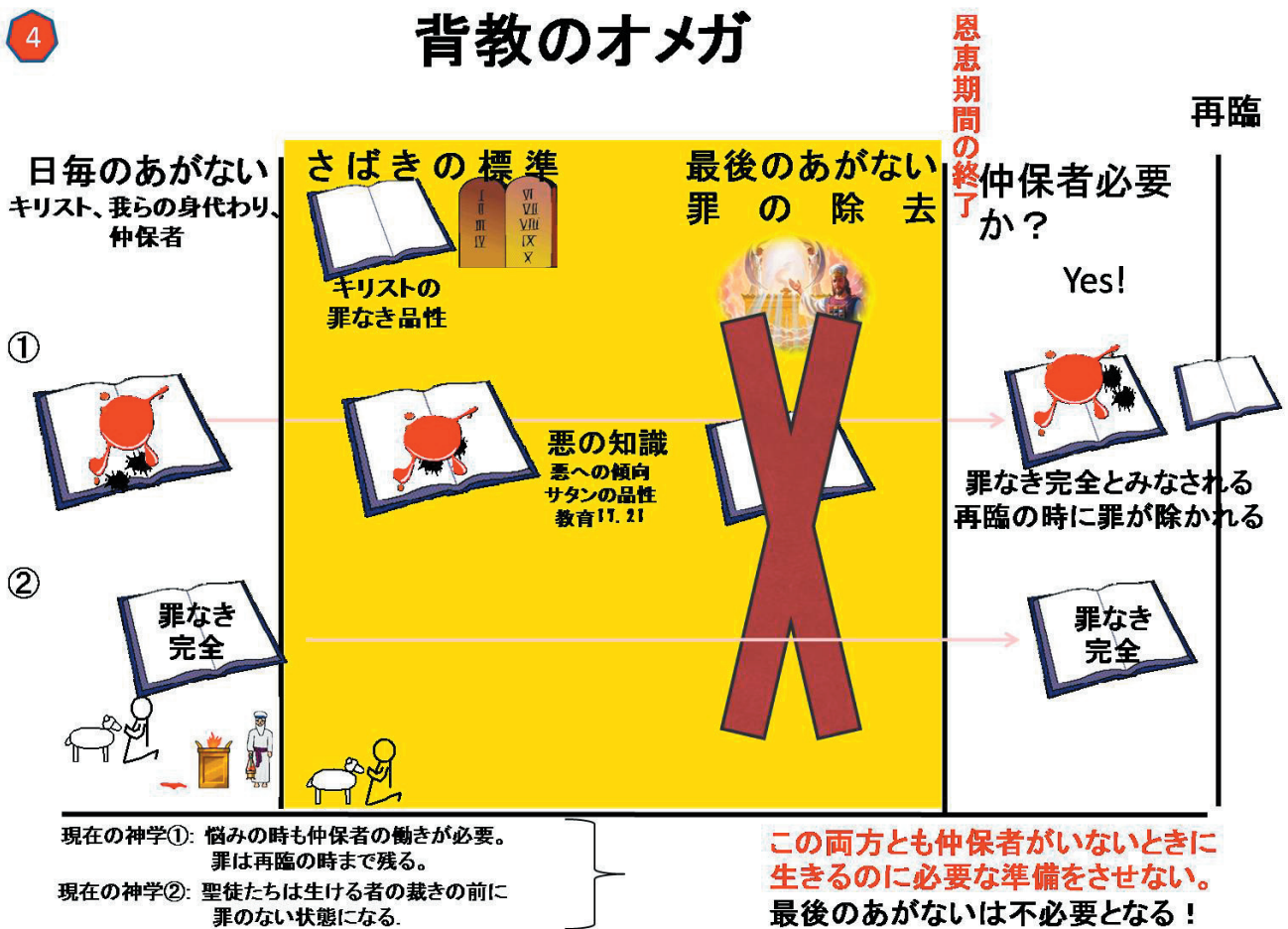
● 神の聖なるみ名の擁護。エゼキエル36:23、あけぼの上61

「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」イザヤ43:25。

チャート4

4

背教のオメガ



● 至聖所における最後のあがないが、神の民に、全宇宙に、神ご自身のためにどんな素晴らしいことをするかを学んだ。

● サタンがどれほどこの真理を憎むかが分かる！ 下記の引用文ほど筆者が強調したい文はほかはない！ 筆者は書きものに説教にこの文を何回繰り返し引用したか分からない。

「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕え、われわれが最もよく知っていなければならない働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである」大争闘下221。

「私どものあがないのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えると、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません」キリストへの道10,11。

- 背教のアルファは、聖所の最初におけるクリスチャン経験を攻撃した。背教のオメガは、クリスチャン経験の最後の仕上げを攻撃するのである。
- サタンはこの最も重要な大真理を考えさせまいと「数えきれないほど多くの策略」を講じる。どんな策略があるだろうか？
- 我々の生活を乱し、人間関係を錯乱させるいろいろなことがある。他人の欠点、自分の欠点に目を集中させるかもしれない。

● キリストの我々のための働きを曲解させ、歪曲させる神学。わが教会に存在する二つの教え。

- ① 「我々はどうせ罪深い性質をもっているのだから、この地上では完全に罪に勝利し、罪のない状態にはなれない。完全に律法には従えない。再臨の時に卑しい体が変わえられる時に罪なき完全な状態になるのである。罪は犯さないかもしれないが『罪深い性質』を持っている限り、完全に罪のない状態にはなれない。したがって再臨まで仲保者が必要である。」
- ② 罪とは、律法の違反であるのだから(1ヨハネ3:4、大争闘下228)、我々はキリストの恵みによって完全に罪を犯さなくなる。このような状態になったら、裁きに合格でき、神の印を受けるのである。裁きの前に完全になっていなければならない。」

この二つの考え方、神学は、日毎のクリスチャン経験を拒まない。しかし、それで天に移されるために十分であるとする。外庭と聖所の経験で十分とする。この自由主義神学と保守主義神学は両方とも「最後のあがない」「特別な贖い」を必要としない。

それは何を意味するだろうか？

それは、第一天使の使命を拒んだプロテスタント諸教会の状態である：

「諸教会が、第一天使の使命を受けることを拒んだときに、彼らは、天からの光を拒否し、神の恵みを失った。彼らは、自分たち自身の力に頼った」初代文集391, 392。

信者は、品性を発達させることによって自分の着物を洗うのである。品性の発達という洗濯の経験においては、キリストがアルファとなりオメガとなられる。聖所と、救いの計画を説明した農夫の譬えは、三段階の信仰経験を表している。始まりまたはアルファの段階は、種の発芽または人の霊的生活の始まりとなる新生を表している。「もしも神が、全自然界にみなぎる存在であるならば、神はすべての人のうちに住まわれる。聖潔に到達するには、人は自らのうちにある力を発達させるだけでよい」というのが、異端のアルファと呼ぶべきものである。この主張の論理に注意されたい。この主張は、神がすべてのものの中にいるのだから、人は新しい心を得るために、キリストを心に招くという最初の段階を踏む必要はないというのである。故に、「生ける宮」という本は、贖罪の最初のステップを廃止し、それにより人を自分自身の救い主とした。なぜなら人は、自らの内にある善を発達させるだけでよいからである。異端のアルファが人のためになされるキリストの最初の働きを攻撃したとすれば、異端のオメガは、人のためになされるキリストの最後の働きを攻撃すると考えることが理にかなっている。その概念をおさらいしてみよう。異端のアルファは贖罪の開始にあたって必要な事柄を除き、人を自分自身の救い主とした。ならば異端のオメガは、救いの計画の最終段階に攻撃を仕掛けるだろうと考えることが理にかなっている。救いの計画のこの最終段階こそが、最後の贖いなのである。悩みの時に、信徒が仲保者なくして生きる備えができるようになるため、最後の贖いは信徒の罪を除去するのである。もし最後の贖いが信徒のためにまだなされていないとすれば、その人は悩みの時に備えができていないということになる。最後の贖いにおいて神が与えて下さる義の賜物を拒むことによって、事実上、人は自分自身の義をもって悩みの時を通過することを選ぶのである。

上記の神学こそ、まさに背教のオメガである！ 贖いの最後(オメガ)を無効にする神学である。

現代の真理はこの二つの狭間にあるのである！ 死んだ義人も、生きている義人も調査審判と罪の除去、すなわち「最後のあがない」の経験を通して天に移されるのである。

イエスの証、最後の預言者、E. G. ホワイトはあまりにも明確にこのメッセージを描写しているので、サタンは、証の書を嫌い、影響力のないものとしたいのである。これがサタンが嫌う「信仰による義認」三天使の使命そのもののメッセージである！

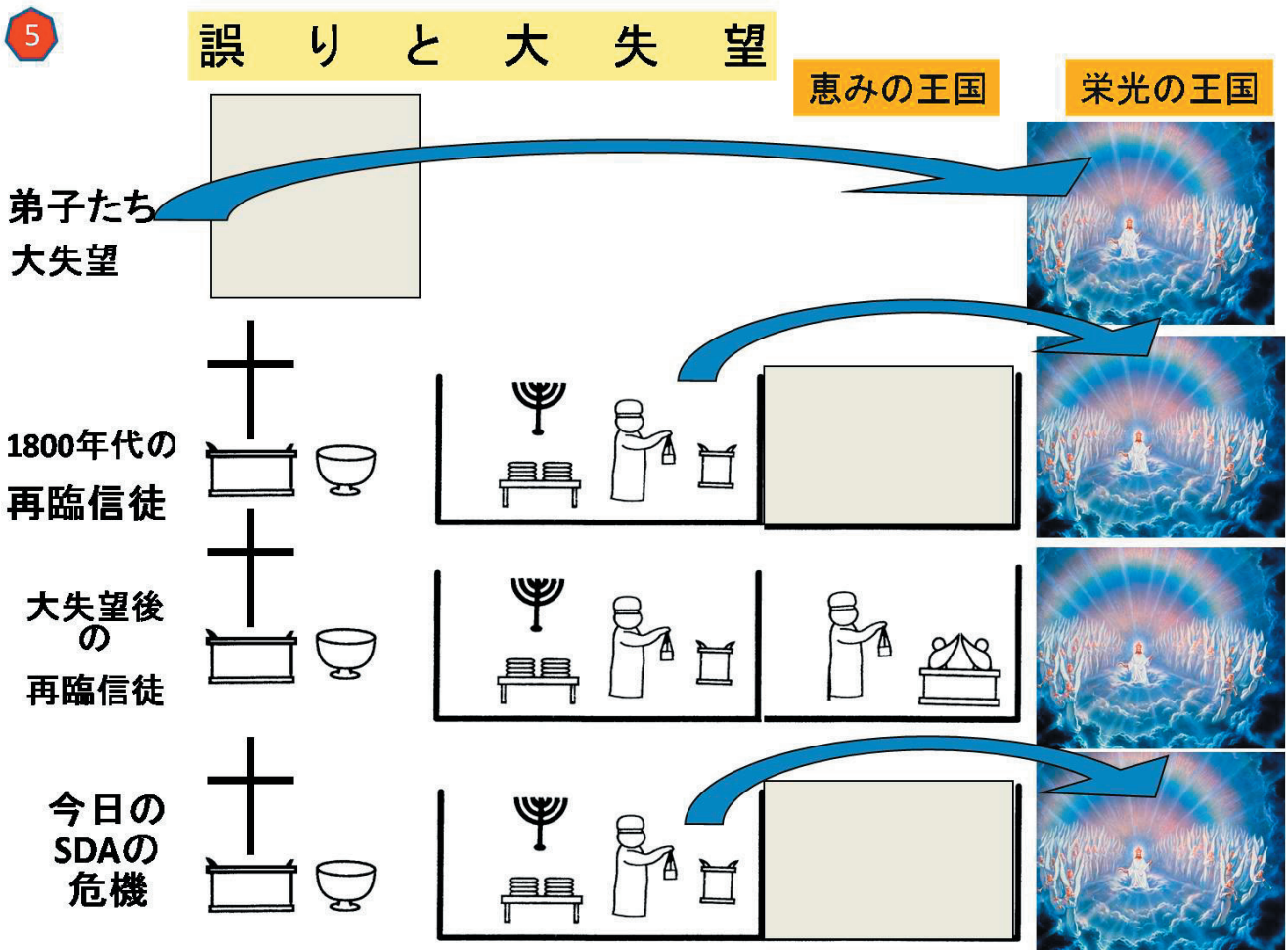
「信仰による義認とは何か？ それは人間の栄光をちりに伏させ、自分の力ではできないことを、人間のためになさる神の働きである」TM456.

言い換えると、「人にはできないが、神にはできないことはない」ということである。

1888年の「信仰による義認」のメッセージは、SDAに与えられた「最も尊いメッセージ」で、至聖所の最後のあがないの祝福をもたらす、ユニークなものである (大争闘下216、217参照)。

.....

チャート5



恵みの王国一人の心に働く神の恵みの活動。天におけるイエスの仲保の働きによって品性が完成される。

栄光の王国—キリストの再臨の時に実現する (大争闘下40参照)。

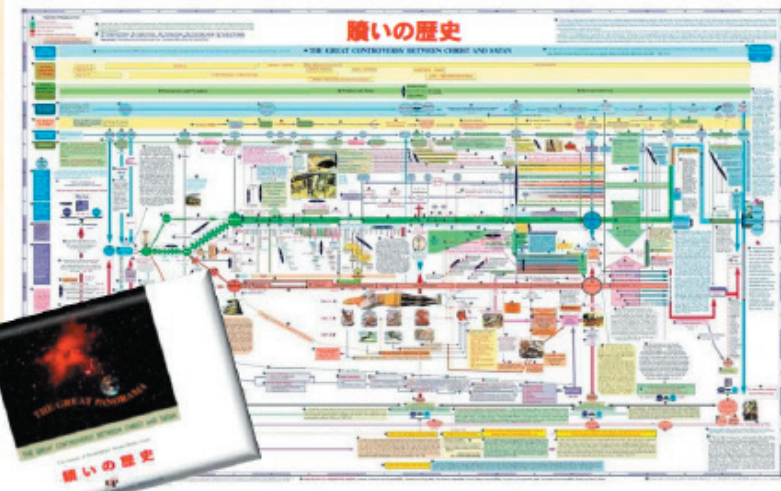
1844年10月22日に栄光のキリストの再臨を待ち望んでいた再臨信徒は大失望の経験を味わった。しかし、彼らはその後天の至聖所に「最後の贖い」をなさるイエスを見出して「喜び」「希望」と「確信」を見出したのである (初代文集414-416参照)。

今日も同じである！

贖いの歴史チャート

E.G.ホワイト著「生き残る人々」のメッセージをチャート化。キリストとサタンの大争闘のモチーフで贖いの歴史を見る。

プラスチックペーパー71cm×101cm
価格:1,500円



Reflecting Christ キリストを映して

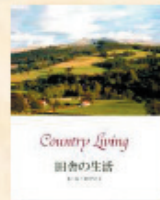
1895年にホワイト刊行協会から出版された朝の礼拝の読み物。

エレン・G・ホワイト著 価格:1,300円

Country Living

田舎の生活

エレン・G・ホワイト 著



最後の神の民に田舎に出よとの警告—その理由。

価格:200円



地球の希望 人間の回復

北アジア太平洋
支部信徒伝道部

金大成 著

伝道用小冊子。
絶望的な地球に
希望を与える
聖書のメッセージ。

無料配布

2009年秋季セミナーの収録集

“最後の贖い” チャールズ・スミス

- CD 【16枚】価格:3,500円 (音声)
- MP3 【DVD-DATA1枚】価格:1,580円 (音声)
- カセットテープ 【16本】価格:3,500円 (音声)

Vegetarian Restaurant HERB 菜食レストラン ハーブ



ベジタリアン クッキング

野菜・果物・穀類・ナッツ類だけを
使用したこだわりの
菜食ヘルシーメニュー。
油、砂糖は控えめ、卵、
牛乳などは使わない。



ローフード (生食)

野菜や果物にふくまれる
ビタミン・ミネラル・酵素
などの自然からの恵みを
生きたままです。

ホールフード (全体食)

精製・精白しない
玄米、全粒粉の
パンやケーキ。

ライフスタイル

心と体は非常に
密接な関係がある。
頭脳や消化に悪影響を及
ぼす、刺激物、アルコー
ル飲料、カフェイン、
白砂糖、香辛料、化学調
味料などを使用しない。

心と体にもっと良いものを...

2010年も菜食レストランハーブを
どうぞよろしくお願いいたします。
空気がおいしいとお食事も
もっとおいしくなります。
絶景を眺めながら心安らぐひと時を
お過ごしください。
みなさまのお越しを
心よりお待ちしております。
スタッフ一同

OPEN AM11:00～PM 6:00

CLOSE 金・土

※春、秋に一週間ほどの臨時休業がございます。

<http://herb.srministry.com/>
沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471
TEL & FAX 0980-56-5681



Anchor
www.srministry.com

サンライズ ミニストリー
〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471
TEL: 0980-56-2783 FAX: 0980-56-2881
Email: contact@srministry.com www.srministry.com
郵便振込番号: 02080-0-12121 サンライズミニストリー